

「3度目のガリラヤ伝道(3)」

§ 070 マタ 10 : 34～11 : 1

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの公生涯は、弟子訓練の段階に入っている。
- ②3度目のガリラヤ伝道では、弟子たちを2人一組にして、派遣している。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「3度目のガリラヤ伝道」 (§ 70)

マタ 9 : 35～11 : 1

(3) この箇所を7分割して学ぶ。

- ①使徒たちを派遣する必要性 (9 : 35～10 : 4)
- ②使徒たちへの具体的指示 (10 : 5～15)
- ③迫害への警告 (10 : 16～23)
- ④拒否への警告 (10 : 24～33)
- ⑤拒否の結果 (10 : 34～39)
- ⑥信じる者への報い (10 : 40～42)
- ⑦結語 (11 : 1)

2. アウトライン

(5) 拒否の結果 (10 : 34～39)

- ①ユダヤ人の時代認識とイエスの時代認識
- ②家族の敵対関係
- ③十字架の道

(6) 信じる者への報い (10 : 40～42)

- ①代理人のユダヤ的概念
- ②預言者のユダヤ的概念
- ③報酬のユダヤ的概念

(7) 結語 (11 : 1)

3. 結論 :

- (1) イエスはなぜ、献身的な愛を要求することができたのか。
- (2) 預言者を受け入れるとは、今の私たちにとってどういう意味があるのか。

12 使徒の派遣について学ぶ。

I. 拒否の結果 (10 : 34~39)

1. ユダヤ人の時代認識とイエスの時代認識

(1) 通常ユダヤ人たちの時代認識

- ① 終わりの時代には患難がやって来る。
- ② その最後にメシアが登場し、イスラエルの民に勝利をもたらす。
- ③ その後、平和な時代が訪れる (メシア的王国への期待)。

(2) イエスの時代認識

- ① ユダヤ人の指導者たちはイエスのメシア性を拒否した。
- ② それゆえ、メシアによる平和はまだ先のことになった。
- ③ イエスの弟子たる者は、迫害や患難に備える必要がある。
- ④ 救いは恵みによるが、弟子としての歩みには犠牲が伴う。

2. 家族の敵対関係 (34~37 節)

(1) 34 節

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです」

- ① イエスは、地に平和をもたらすために来られた。
- ② エペ 2 : 14~17

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。それからキリストは来られて、遠くにいたあなたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました」

- ③ ヨハ 3 : 17

「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである」

「3度目のガリラヤ伝道(3)」

- ④もしユダヤ人たちがイエスを受け入れていたなら、平和が来ていた。
- ⑤しかし彼らはイエスを拒否したので、剣をもたらすような結果になった。

(2)35～36節

「なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります」

- ①ミカ7:6の引用である。
 - *ミカの時代の状況の描写である。
 - *彼は、救いをもたらす【主】への信頼を告白している。
- ②父が信者になると、息子が反対する。
- ③母が信者になると、娘が反対する。
- ④しゅうとめが信者になると、嫁が反対する。
- ⑤信者にとっては、家族が最も手ごわい敵となる。

(3)37節

「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」

- ①弟子は、イエスを選ぶか、家族を選ぶかの二者択一を迫られる。
- ②弟子は、愛の優先順位をはっきりさせる必要がある。

3. 十字架の道(38～39節)

(1)38節

「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません」

- ①十字架刑は、公衆の面前で行われる「見せしめの刑」、「辱めの刑」である。
- ②罪人は、十字架の横木を負って町の真ん中を進んで行った。
- ③そのように、イエスの弟子は、イエスこそメシアであることを公の場で宣言する。いかなる辱めを受けても、それを行う。

(2)39節

「自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします」

- ①ここでは、家族以上に大事にしている「自分のいのち」が問題とされる。
- ②それさえも、愛の優先順位からすると、一番ではない。
- ③この逆説的真理は、終末的真理である。

④と同時に、現在が適用可能な真理でもある。

II. 信じる者への報い(10:40~42)

1. 代理人のユダヤ的概念(40節)

「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです」

(1)代理人は、遣わした主人の権威を帯びて派遣される。

①代理人を受け入れることは、主人を受け入れることである。

(2)父なる神→イエス→使徒たち

①使徒たちを受け入れることは、イエスを受け入れることである。

②イエスを受け入れることは、父なる神を受け入れることである。

③ゆえに、使徒たちを受け入れることは、父なる神を受け入れることである。

2. 預言者のユダヤ的概念(41節)

「預言者を預言者だというので受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます」

(1)旧約聖書の3大職責

①王

②祭司

③預言者

(2)ユダヤ人たちは、預言者が受ける報いが一番大きいと考えていた。

①預言者は、王と祭司に向かって神のことばを教える。

(3)ここでは、弟子たちは「預言者」や「義人」と呼ばれている。

①預言者を受け入れる者は、預言者の受ける報いを受ける。

②義人を受け入れる者は、義人の受ける報いを受ける。

3. 報酬のユダヤ的概念(42節)

「わたしの弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません」

(1)ユダヤ人たちは、今の世と次の世とを対比させる考え方をしていた。

「3度目のガリラヤ伝道(3)」

- ①今の世で行う善行は、次の世での報いをもたらす。
- ②イエスのこのことばは、地上的な適用を持っている。

(2) 「この小さい者たち」

- ①文脈では、イエスの弟子たちである。
- ②福音を宣べ伝える者たちである。

(3) 「水一杯でも飲ませるなら」

- ①貧しい人たちは、それしかできない。
- ②しかし、これで十分であるし、これこそ必要不可欠なものである。

Ⅲ. 結語 (11:1)

「イエスはこのように十二弟子に注意を与え、それを終えられると、彼らの町々で教えたり宣べ伝えたりするため、そこを立ち去られた」

(1) 弟子たちはガリラヤ各地に派遣されたと考えるべきである。

- ①弟子たちは、イエスの権威を帯びて、出て行った。
- ②教え、癒し、福音を宣べ伝えた。

(2) イエス自身も、宣教に立たれた。

- ①「彼らの町々」とは、弟子たちの故郷であろう。

(3) この時から、信じるとは「個人の決断」、「個人の責任」となった。

結論：

1. イエスはなぜ、献身的な愛を要求することができたのか。

(1) ルカ 14:26

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」

- ①家族を憎むのは、律法違反である。
- ②ユダヤ文化では、家族の絆は非常に固い。
- ③「憎む」とは、愛の優先順位を強調するための言葉である。
- ④イエスへの愛を第一にすることである。
- ⑤事実、家族の懇願を振り切ってイエスに献身する者は、家族を憎んでいるかの

ように見える。

(2) 申6:4~5

「聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい」

- ①イエスは、弟子たちにこのことを要求されたのである。
- ②この要求は、イエスの神性宣言である。

2. 預言者を受け入れるとは、今の私たちにとってどういう意味があるのか。

(1) マタ10:41

「預言者を預言者だということで受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます」

- ①弟子たちを受け入れた者は、イエスがメシアであることを信じた者である。
 - ②弟子たちは、お礼返しの心配をする必要はない。
 - ③イエス自身が彼らに報酬を与えてくださる。
- (例話) 献金を呼びかけることへの躊躇

(2) 伝道者の心構え

- ①自分は神のことばを正しく伝えているだろうか、自問自答する。
- ②それができたなら、支援を受けることに抵抗感を覚える必要はない。
- ③なぜなら、神がその人に報酬を与えてくださるから。

(3) 支援者の心構え

- ①その人が神のことばを語っているかどうかを、吟味する。
- ②もし語っているなら、その人の働きを妨害するのは、神に敵対する行為である。
- ③そのような人を支援するなら、その人が受ける報いが、自分にも与えられる。
- ④「水一杯でも」大いに有効である。

「バプテスマのヨハネの死」

§071 マコ6:14~29

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①3度目のガリラヤ伝道で、弟子たちが2人一組で派遣された。
- ②イエスも活動された。
- ③弟子たちが癒しや悪霊の追い出しをしていることがヘロデの耳に入った。
- ④罪責感に悩む彼は、この知らせを恐れた。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「バプテスマのヨハネの首をはねた罪責感から、イエスを恐れたヘロデ・アンテパス」 (§71)

マコ6:14~29、マタ14:1~12、ルカ9:7~9

2. アウトライン

(1) オープニング

(2) フラッシュバック

- ①投獄の場面
- ②宴会の場面
- ③処刑の場面

(3) エンディング

3. 結論:

バプテスマのヨハネの死の意味について学ぶ

I. オープニング (14~16節)

1. 罪責感に苦しむヘロデ (14節a)

「イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った」

- (1) ヘロデ王とは、ヘロデ・アンテパスのことである。
 - ①彼は王ではなく、ガリラヤ地方とペレア地方の「国主」である。
 - ②ギリシア語で「テトラーク」という (父の4分の1の領地を支配した)。
 - ③彼を王と呼ぶのは、マルコだけである。

④これは皮肉である。ヘロデは王のように振る舞い、墓穴を掘る。

(2) イエスと弟子たちの働きが、評判になっていた。

①それを耳にしたヘロデは、恐れを覚えた。

②罪責感から来る恐れである。

2. ヘロデの結論 (14b～16 節)

「人々は、『バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ』と言っていた。別の人々は、『彼はエリヤだ』と言い、さらに別の人々は、『昔の預言者の中のひとりのような預言者だ』と言っていた。しかし、ヘロデはうわさを聞いて、『私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ』と言っていた」

(1) 3つの意見

①バプテスマのヨハネが死人の中から復活した。

②死を経ないで天に上げられたエリヤが登場した。

③途切れていた預言者の系譜を復活させる預言者が登場した。

(2) ヘロデは、バプテスマのヨハネが復活したと考えていた。

「悪者は追う者もないのに逃げる。しかし、正しい人は若獅子のように頼もしい」

(箴 28 : 1)

「わざわざは罪人を追いかけ、幸いは正しい者に報いる」(箴 13 : 21)

II. フラッシュバック

1. 投獄の場面

(1) 17～18 節

「実は、このヘロデが、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、——ヘロデはこの女を妻としていた——人をやってヨハネを捕らえ、牢につないだのであった。これは、ヨハネがヘロデに、『あなたが兄弟の妻を自分のものとしていることは不法です』と言い張ったからである」

①ヘロデヤは、叔父のヘロデ・ピリポと結婚した(近親結婚。律法違反)。

*この結婚から、サロメが誕生した。

②ヘロデとヘロデヤの結婚は、律法違反である(レビ 18 : 12～16、20 : 19～21)。

*ヘロデヤは姦淫の罪を犯した。

*ヘロデは元の妻(ナバテヤのアレタ 4 世の娘)を離縁させた。

③ヨハネは、ヘロデとヘロデヤの結婚を非難したため、投獄された。

②投獄の場所は、マケラスの砦である(ヨルダン川の東、死海の北端の辺り)。

*ヘロデ王が建設した3つの要塞。マサダ、ヘロデイウム、マケラス。

*マケラスは王宮であるが、その中に牢獄があった。

*以上は、ヨセフによる情報である。

(2) 19～20節

「ところが、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、果たせないでいた。それはヘロデが、ヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、保護を加えていたからである。また、ヘロデはヨハネの教えを聞くとき、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた」

①ヘロデヤは、ヨハネに対して殺意を抱いていた。

*非常に野心家で残忍な女性

②ヘロデは、ヨハネを保護していた。

*ヨハネを恐れていた。これは、迷信的恐れである。

*当惑しながらも、ヨハネの話喜んで聞いていた。

*ローマ人の貴族たちは、哲学者の話聞くことを趣味としていた。

*ヘロデはローマ文化の影響を受けていた。

③ヘロデは、妻のヘロデヤとバプテスマのヨハネの板挟みになっていた。

*性格的に弱い人物

2. 宴会の場面

(1) 21節

「ところが、良い機会が訪れた。ヘロデがその誕生日に、重臣や、千人隊長や、ガラヤのおもだった人などを招いて、祝宴を設けたとき、」

①誕生パーティは、ギリシア人やローマ人の習慣で、ユダヤ人のものではない。

②彼は、ローマ風文化の影響を受けている。

(2) 22～23節

「ヘロデヤの娘が入って来て、踊りを踊ったので、ヘロデも列席の人々も喜んだ。そこで王は、この少女に、『何でもほしい物を言いなさい。与えよう』と言った。また、『おまえの望む物なら、私の国の半分でも、与えよう』と言って、誓った」

①ヘロデヤの娘とは、サロメのことである。

②「娘」(コラシオン)とは、12～14歳の女性。結婚可能な年齢。

③彼女は、ヘロデヤの策略によって宴会場に送り込まれた。

④この踊りは、官能的なものであった。

⑤ヘロデは義理の娘に欲情を覚えた(兄弟の妻をめとった後、さらに…)。

⑥レビ20:14

「人がもし、女をその母といっしょにめとるなら、それは破廉恥なことである。彼も彼女らも共に火で焼かれなければならない。あなたがたの間で破廉恥な行為があってはならないためである」

⑦「おまえの望む物なら、私の国の半分でも、与えよう」とは格言である。

*これを文字通りに受け取る必要はない。

*ヘロデには、自分の自由になる王国はない。

(3) 24～25節

「そこで少女は出て行って、『何を願ひましょうか』とその母親に言った。すると母親は、『バプテスマのヨハネの首』と言った。そこで少女はすぐに、大急ぎで王の前に行き、こう言って頼んだ。『今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せていただきとうございます』」

①母親は同席していなかった。

*マケラスの要塞には、食堂が2つあった。男女が分かれて食事をした。

②母親は間髪を入れずに、「バプテスマのヨハネの首」と言った。

*あらかじめシナリオを作っていた。

③大急ぎで王の前に行ったのは、王が心変わりをする前にことを行うためである。

④首を盆に乗せるのは、宴会のメニューのひとつに見立てたものである。

3. 処刑の場面

(1) 26節

「王は非常に心を痛めたが、自分の誓いもあり、列席の人々の手前もあって、少女の願いを退けることを好まなかった」

①ヘロデはこの申し出を断ることもできた。

②しかし、面子を保つために少女の願いを聞き入れた。

③彼に必要なのは、「蛇のようにさとく、鳩のようにすなおであれ」という教え。

(2) 27～28節

「そこで王は、すぐに護衛兵をやって、ヨハネの首を持って来るように命令した。護衛兵は行って、牢の中でヨハネの首をはね、その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女は、それを母親に渡した」

①ユダヤ地方では、イエスを処刑する際にローマの許可が必要であった。

②ガリラヤ地方では、ヘロデ・アンテパスが王のように振る舞っていた。

Ⅲ. エンディング

1. 弟子たちによる埋葬 (29 節)

「ヨハネの弟子たちは、このことを聞いたので、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めたのであった」

(1) 通常は、遺体を埋葬するのは、長男の仕事である。

①ここでは、弟子たちがその役割を果たしている。

(2) これは非常に危険な行為でもあった。

①イエスの弟子たちは、埋葬の場になかった。

②切断された遺体は、牢獄から出され、外に捨て置かれた (ヨセフスの情報)。

③弟子たちは、それを拾って墓に納めたのであろう。

2. エンディングロール

(1) この後、ヘロデ、ヘロデヤ、サロメの3人は悲惨な最期を迎えることになる。

結論：

1. 神をあなどってはならない。

(1) ヘロデとヘロデヤはどうなったのか。

①しばらくして、ナバテヤのアレタ4世が離縁された娘の遺恨を晴らすために、戦争を仕掛けて来た。

②ヘロデとヘロデヤは、大敗を喫し、大急ぎで逃亡した。

③ヘロデヤの誘惑で、ヘロデは「王」の称号をローマに求めたが、元老院の決定により、ガリア (リオン) に追放された。

④その地で二人は、悲惨な死を遂げた。

(2) サロメは母親と同じ道を歩んだ。

①叔父のピリポ (国主) と結婚した。

②後に、従弟のアリストブロスと再婚した。

③氷の上を歩いていた時、氷が割れて水に落ちた。

④首だけが氷の上に出ていた。

⑤もがいているうちに、氷の鋭利な刃で首がはねられたような状態になった。

2. ヨハネとヘロデヤの葛藤は、エリヤとイゼベルの葛藤と相関関係にある。

「彼らはイエスに尋ねて言った。『律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか。』イエスは言われた。『エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか。しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです』(マコ9:11~13)

(1) イゼベルとヘロデヤは、ともにドミナント(支配的な)女性である。

①人だけでなく、神さえも自分の思い通りに動かそうとする。

(2) エリヤの場合は、命が守られ、最後は生きたまま天に上げられた。

①バプテスマのヨハネの場合は、殉教の死を遂げた。

3. ヨハネの苦しみ(パッション)は、メシアの苦しみ(パッション)の型である。

(1) きょうの箇所は、メシアの先駆者のパッションの記録である。

①メシアに起こることは、メシアの先駆者にも起こる。

(2) ヨハネの死のタイミング

①彼の奉仕期間は、12~14ヶ月である。

②その後、約2年間獄中にあった。

③合計、3年強の期間の奉仕である。イエスの公生涯とほぼ同じ。

④イスラエルは民族的にメシアを拒否した。

⑤このタイミングで、ヨハネの先駆者としての奉仕も終了した。

(3) 私たちへの教訓

①生きるのも死ぬのも、神の御心のままである。

②奉仕の方法と期間も、神の御心のままである。

③短期計画、中期計画、長期計画

「5千人のパンの奇跡」

§ 072 マコ 6 : 30~44

§ 073 ヨハ 6 : 14~15

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①3度目のガリラヤ伝道で、弟子たちが2人一組で派遣された。
- ②戻ってきた彼らは、イエスに報告をした。
- ③その直後にこの奇跡が起こった。
- ④非常に重要な奇跡である。

*四福音書すべてにこれが記録されている。

*ヨハネの福音書では、7つの「しるし」の第4番目に当たる。

*ヨハ 6 : 4によれば、過越の祭りが近づいていた。

*つまり、イエスの公生涯の最後の1年の始まりである。

- ⑤イエスの興味は、弟子訓練にある。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「5千人を養った奇跡」 (§ 72)

マコ 6 : 30~44、マタ 14 : 13~21、ルカ 9 : 10~17、ヨハ 6 : 1~13

「政治的メシア擁立の動き」 (§ 73)

マコ 6 : 45~46、マタ 14 : 22~23、ヨハ 6 : 14~15

2. アウトライン

(1) 場面設定

- ①伝道旅行の報告
- ②多くの群衆

(2) 奇跡

- ①イエスと弟子たちの対話
- ②イエスの命令

(3) 結果

3. 結論 :

- (1) 弟子訓練の内容
- (2) 私たちへの適用

5千人のパンの奇跡を通して、イエスの弟子訓練について学ぶ。

I. 場面設定

1. 伝道旅行の報告

(1) 30節

「さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告した」

- ①イエスのいない初めての伝道旅行から帰還した弟子たち
- ②あらかじめ、集合の日時と場所を決めていたのであろう(カペナウム周辺)。
- ③彼らは、行為(works)、言葉(words)の順で報告した。
- ④気分の高揚があるが、疲れも見て取れる。

(2) 31節

「そこでイエスは彼らに、『さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい』と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである」

- ①今も、この言葉が必要な人がたくさんいる。
- ②忠実なしもべにとっては、「ゴールデンタイム」である。

2. 多くの群衆

(1) 32～33節

「そこで彼らは、舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行った。ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先に着いてしまった」

- ①舟に乗って、寂しい所へ行った。
- ②「自分たちだけで」とは、プライベートに(個人的に、密かに)という意味。
- ③ルカ9:10には、「ベツサイダという町」とある。
 - *ガリラヤ湖の北西にある町(ペテロ、アンデレ、ピリポの出身地)
 - *ガリラヤ湖の北東にある町(ベツサイダ・ユリアス)
- ④多くの人々が湖岸を駆けて、船よりも先に目的地に着いていた。
- ⑤弟子たちの休息の時間は、舟の中だけとなった。

(2) 34節

「イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた」

- ①イエスは群衆に悩まされたのではなく、彼らを深くあわれまれました。
 - *「スプラクニゾマイ」という動詞。はらわたと関係がある。
- ②「羊飼いのいない羊のよう」という表現は、マタ9:6に出てきた。
 - *マルコは、それとは異なった文脈でこの表現を用いている。
 - *群衆は、誰に従っていいのかわからなくなっていた。
- ③イエスの羊飼いとしてのケア(働き)
 - *マルコ:いろいろと教えた。
 - *マタイ:いやした。
 - *ルカ:教え、いやした。
 - *励ましの奉仕の中心は、健全な教えを与えることである

II. 奇跡

1. イエスと弟子たちの対話

(1) 35~36節

「そのうち、もう時刻もおそくなったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。『ここはへんびな所で、もう時刻もおそくなりました。みんなを解散させてください。そして、近くの部落や村に行って何か食べる物をめいめいで買うようにさせてください』」

- ①イエスは一日中、群衆に教えたが、その内容は書かれていない。
- ②しかし、弟子たちとの対話は詳細に描かれている。これがポイントである。
- ③「もう時刻もおそくなりました」
 - *ユダヤ的には、午後3時ごろ。
 - *夕方となると、日没の時間。
 - *弟子たちは、日没になる前に食物を調達させるように提案している。
- ④「近くの部落や村に行って」
 - *近くには、ベツサイダ・ユリアスの町がある。

(2) 37節

「すると、彼らに答えて言われた。『あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。』そこで弟子たちは言った。『私たちが出かけて行って、二百デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、ということでしょうか』」

- ①イエスの回答は、予想外のものであった。
- ②「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」
 - *強調点は、「あなたがた」にある。

③ヨハ6:5でイエスは、ピリポを試して言われた。

「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか」

*恐らくその辺りは、ピリポが伝道したエリヤだったのだろう。

④200デナリとは、当時の農夫の200日分の賃金である(約8ヶ月分)。

(3) 38節

「するとイエスは彼らに言われた。『パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい。』彼らは確かめて言った。『五つです。それと魚が二匹です』」

①ヨハ6:8では、アンデレが少年を連れて来た。

②大麦のパン5つと、2匹の魚(塩をして乾燥させた魚。焼いた魚)

2. イエスの命令

(1) 39~40節

「イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた」

①ガリラヤ湖畔で青草が生えるのは、春の季節だけである。

②座るとは、肘をついて横になること(recline)。

③100人、50人の食卓ができたということ。

④訳語の比較(40節)

「そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた」(新改訳)

「人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした」(新共同訳)

「人々は、あるいは百人ずつ、あるいは五十人ずつ、列をつくってすわった」

(口語訳)

⑤ギリシア語では、「プラシアイ、プラシアイ」となっている。

*花壇のこと(さまざまな色の衣装があった)

*ここには、秩序と色彩(青草の上に出来た花壇)がある。

⑥この奇跡物語を信じられるか。

*マタイは目撃者である。

*ヨハネも目撃者である。

*マルコの福音書にはペテロの目が反映されている。

(2) 41節

「するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた」

①食前の祈りは、食事を与えてくださったお方をたたえる祈りである。

- ②「天を見上げ」とは、父なる神への信頼を示す行為である。
- ③「弟子たちに与えた」は、「与え続けた」である。

(3) 42～44 節

「人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れを十二のかごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた。パンを食べたのは、男が五千人であった」

- ①人々は満腹した。
- ②残ったパン切れは、12のかごに一杯になった。魚も残った。
 - *コプリノスは、小さなかご。
 - *スプリスは、大きなかご。
 - ・マタ 15 : 37 (4千人のパンの奇跡。7つのかご)
- ③満足したのは、男だけで5千人。それ以外に、女や子どもがいた。

III. 結果 (ヨハ 6 : 14～15)

(1) 14 節

「人々は、イエスのなさったしるしを見て、『まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ』と言った」

- ①食べて満腹した人々は、非常に喜んだ。
- ②彼らは、イエスを政治的メシアにしようとした。

(2) 15 節

「そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行こうとしているのを知って、ただひとり、また山に退かれた」

- ①人々は、イエスを無理やり王としようとした。
- ②イエスはひとり山に退かれた。
- ③このことを容認できない理由がある。
 - *彼らの動機が間違っている。食物を求めたのである。
 - *預言的には、メシアが王位に着座するのはエルサレムである。
 - *詩 2 : 6

「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに」

*赦されない罪はすでに犯された (民族的にイエスを拒否した罪)。

結論：

1. 弟子訓練の内容

- (1) 神はご自身のしもべの必要を満たされるお方である。
 - ①イエスの力を決して疑ってはならない。
 - ②弟子たちは、まだ理解できていない。マコ6:52。

- (2) 「あなたがたで、あの人たちに上げなさい」という命令がある。
 - ①イエスから受ける。
 - ②それを人々に届ける。
 - ③イエス自身は、パンを配らなかつた。
 - ④神は、ご自身のしもべたちをお用いになる。

- (3) 組織的に奉仕することが肝要である。
 - ①50人、100人の組

- (4) 神の恵みは十分にある。
 - ①神は、気前のよい方である。
 - ②始めた時よりも、最後の量の方が多い。
 - ③5つのパンと2匹の魚を差し出した少年は、どうなったのか。

2. 私たちへの適用

- (1) 信仰の動機が問われる。
 - ①パンのためにイエスに従うのは、間違っている。
 - ②パンのためとは、物質的繁栄のことである。
 - ③真の信仰は、神を神と認めるところに育つ。

 - (2) イエスのパン裂きは、十字架の恵みを教えている。
 - ①空腹の人びとを満足させるため
 - ②ここには、最後の晩餐のイメージがある。
 - *パンは、イエスのからだの象徴である。
 - ③イエスの十字架上の死
 - *私たちが永遠のいのちを得るために、イエスのからだは裂かれた。
- (例話) 車のキーを失くした人の話

「嵐の海での弟子訓練」

§ 074 マタ 14 : 24~33

§ 075 マコ 6 : 53~56

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①5,000千人のパンの奇跡の目的は、弟子訓練であった。
- ②きょうの箇所も、中心テーマは弟子訓練である。
- ③弟子訓練のテーマは、私たちへの適用を多く含む。
- ④前回の箇所は、以下の内容で終わった。
 - *群衆がイエスを王にしようとした。
 - *イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、向こう岸へ行かせた。
 - *イエス自身は、祈るために、ひとりで山に登られた。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「嵐の海で苦闘する弟子たち」 (§ 74)

マコ 6 : 47~52、マタ 14 : 24~33、ヨハ 6 : 16~21

「ゲネサレでの歓迎」 (§ 75)

マコ 6 : 53~56、マタ 14 : 34~36

2. アウトライン

- (1) 弟子たち全員の訓練
- (2) ペテロの訓練
- (3) 訓練の結果
- (4) 群衆と弟子たちの対比

3. 結論 :

- (1) 弟子訓練の内容
- (2) 私たちへの適用

嵐の海での弟子訓練を通して、自らのクリスチャン生活を吟味する。

I. 弟子たち全員の訓練

1. 訓練に入る前の状況

- (1) イエスが弟子たちを強いて舟に乗り込ませた理由

- ①彼らを群衆から遠ざけるため。
- ②5,000人のパンの奇跡の意味を考えさせるため。
- ③イエス自身は、祈るために山に登られた。

(2) そして、「夕方になった」。

- ①日没になったということ。
- ②これは、ガリラヤ湖に西風が吹く時間帯である。

2. 24節

「しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた」

(1) 最初は順調な船出であったのだろう。

- ①陸からは何キロも離れた。

(2) 次に逆風が吹いてきた。

- ①弟子たちは湖上を西に向かっていた。
 - *ベツサイダ・ユリアス (ガリラヤ湖の東側)
 - *ギノサレ (ガリラヤ湖の西側)
- ②逆風は、弟子訓練にとって不可欠の要素である。

(3) 舟は、波に悩まされていた。

- ①「バサニゾウ」という動詞。内面的な動揺、葛藤、痛みなどを指す。
- ②舟が悩まされていたとは、舟の中の弟子たちのことである。
- ③ここでは、死への恐れが問題なのではない。
 - *長時間の格闘から来る疲れ
 - *思い通りにならないこと
 - *意気消沈

3. 25節

「すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた」

(1) 「夜中の三時ごろ」

- ①「第4の見張り時間」(the fourth watch of the night)
- ②午後6時から午前6時を4区分するのがローマ式(ユダヤ式は3区分)
- ③「第4の見張り時間」は、午前3時から6時の間である。
- ④弟子たちは、6～9時間、湖の上で格闘していたことになる。

⑤神の助けはすぐに来なくても、そこには意味がある。

(2) イエスは見ておられる。

「イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった」(マコ6:48)

(3) 「イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた」

①旧約聖書で水に関する奇跡を行った人物が4人いる。

*モーセ、ヨシュア、エリヤ、エリシャ

②しかし、水の上を歩いた者はいない。

③イエスには、自然界を支配する権威がある。

4. 26～27節

「弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、『あれは幽霊だ』と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、『しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない』と言われた」

(1) 「あれは幽霊だ」と言った理由

①月明かりだけが頼りの湖面

②人のような姿をした者が、湖の上を歩いて近づいてくる。

③人は湖の上を歩けない。

④それゆえ、その者は「霊」である。

*「ファンタスマ」

*ユダヤ教の教えの中にはないが、古代世界の民間信仰にはある。

*漁師の迷信の影響も見られる。

⑤ここでは、彼らは本気で恐れている。

(2) 「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」

①イエスはすぐに彼らに話しかけている。近くにおられた。

②「わたしだ」は、「It is I.」とも、「I am.」とも取れる。

③後者の場合は、イエスの神性宣言である(出3:14、イザ43:10、13)。

II. ペテロの訓練

はじめに

①マタ14:28～31は、マタイの福音書にだけ出てくる情報である。

②予期せぬ形でペテロの信仰訓練が始まった。

1. 28節

「すると、ペテロが答えて言った。『主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください』」

- (1) ペテロはイエスの力を試しているのではない。
 - ①彼は、イエスに対する信頼を告白しているのである。
 - ②彼は、旧約聖書の聖人たちでさえもしなかったことを願っている。
 - ③さらに言うならば、彼は奇跡を求めているのではなく、イエスに近づくことを求めているのである。

- (2) イエスの弟子は、イエスが行うのと同じことを行うようになる。
 - ①ペテロは、この真理を理解し始めていた。

2. 29節

「イエスは『来なさい』と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った」

- (1) 信仰に「本音と建て前」はない。
 - ①イエスは、ペテロの願いを叱責していない。
 - ②ただ単に、「来なさい」と命じられただけである。

- (2) 著者の強調点は、イエスのほうに行ったという点である。
 - ①舟から出たのは、そのためである。
 - ②水の上を歩いたのも、そのためである。

3. 30節

「ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、『主よ。助けてください』と言った」

- (1) 風を見た。
 - ①大きな船のデッキから風を見るのと、海の中で風を見るのとは大違いである。
(例話) 鳥かごの中のハブ、サイに追われた経験
 - ②信仰が働いていた時は、イエスの力によって重力の法則に逆らうことができた。
 - ③風を見たとたんに、普段通り重力の法則に支配されるようになった。

- (2) 漁師である彼が、恐れた。

- ①「主よ。助けてください」は「主よ。すぐに助けてください」という意味。
- ②これは、祈りである。

4. 31節

「そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。『信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか』」

(1) マタ 8 : 26

「イエスは言われた。『なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。』それから、起き上がって、風と湖をしっかりとつけられると、大なぎになった」

- ①まず、弟子たちの不信仰を叱責した。
- ②次に、嵐を静めた。

(2) ここでは順序が逆である。

- ①まず、ペテロを助けた。
- ②次に、叱責した。

III. 訓練の結果

1. 32～33節

「そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、『確かにあなたは神の子です』と言った」

(1) ペテロは、イエスに抱えられて、嵐の湖の上を歩きながら舟に戻った。

- ①その瞬間、風がやんだ。
- ②これは、偶然ではない。

(2) マコ 6 : 51～52

「そして舟に乗り込まれると、風がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである」

(3) 舟の中で礼拝が始まった。

- ①「確かにあなたは神の子です」
- ②彼らは、イエスの神性を認めた。

(4) ヨハ 6 : 21 によれば、イエスが舟に乗ると、舟はすぐに目的地に着いた。

IV. 群衆と弟子たちの対比

1. マコ6:53~55

「彼らは湖を渡って、ゲネサレの地に着き、舟をつないだ。そして、彼らが舟から上がると、人々はすぐにイエスだと気がついて、そのあたりをくまなく走り回り、イエスがおられると聞いた場所へ、病人を床に載せて運んで来た」

(1) ゲネサレの地 (ギノサレ)

- ①ガリラヤ湖の北西に広がる横3キロ、縦10キロほどの肥沃な地。
- ②「神の園」、「パラダイス」などと称せられた。
- ③今は、ノフ・ギノサレという場所がある (イエスの舟の展示場)。

(2) イエスは人々から大いに歓迎された。

2. マコ6:56

「イエスが入って行かれると、村でも町でも部落でも、人々は病人たちを広場に寝かせ、そして、せめて、イエスの着物の端にでもさわらせてくださるようにと願った。そして、さわった人々はみな、いやされた」

- (1) 彼らの信仰が表面的なものであることは、すぐに明らかになる。
- (2) それに対して、弟子たちの信仰は、質の異なる段階へと成長していった。

結論：

1. 弟子訓練の内容

(1) 前回の嵐の中の舟の場面

- ①イエスは舟の中で眠っていた。
- ②弟子たちは嵐を恐れた。ここには誤解はない。
- ③イエスは、彼らの不信仰を叱責された。

(2) 今回の状況

- ①イエスは舟の中にはいなかった。
- ②弟子たちは、嵐ではなくイエスを恐れた。ここには、誤解がある。
- ③これは私たちの体験でもある。
- ④創42:36

「父ヤコブは彼らに言った。『あなたがたはもう、私に子を失わせている。ヨセフはいなくなった。シメオンもいなくなった。そして今、ベニヤミンをも取ろうとしている。こんなことがみな、私にふりかかって来るのだ』」

(3) 嵐は、弟子訓練のために必要不可欠なものである。

①弟子たちは、困難な状況の中でもイエスに信頼するように訓練を受けた。

2. 私たちへの適用 (ペテロの体験)

(1) 衝動的信仰

①決して悪いことではない。

②しかし、これだけでは不十分である。

(2) 力ある信仰

①実際に、水の上を歩いてイエスのもとに行けた。

(3) 途切れ途切れの信仰

①イエスから目が離れた。

②その時、ペテロは普通の人に戻ってしまった。

③へブ 12 : 2

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました」

(4) 回復された信仰

①祈りによる回復

②リビングバイブル訳は、問題がある。

「ところが、高波を見てこわくなり、沈みかけたので、大声で、『助けてくれーっ』と叫びました」(マタ 14 : 30)

「天から下ったパン(1)」

§ 076 ヨハ6:22~35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①湖の東側で5,000千人のパンの奇跡が起こった。
- ②弟子たちは、舟に乗って湖の西側に向かった。
- ③イエスは、祈るために山に上られた。
- ④向かい風のために、弟子たちは湖上で格闘していた。
- ⑤イエスは水の上を歩き、舟に近づかれた。
- ⑥ペテロの水上歩行の出来事があった。
- ⑦イエスが舟に入ると、舟はすぐに目的地に着いた。

(2) この箇所は、5000人のパンの奇跡が起こった日の翌日のことである。

- ①イエスは、カペナウムの会堂で群衆を教えた。
- ②ヨハネの福音書にはイエスの説教が7つ出てくる。その3番目のもの。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「人々が期待するメシア像に答えないイエスと、ガリラヤ伝道の崩壊」 (§ 76)

ヨハ6:22~71

2. アウトライン(対比)

- (1) 肉的動機と霊的動機(22~29節)
- (2) 古いマナと新しいマナ(30~35節)
- (3) 信じない者と父から招かれた者(36~40節)
- (4) つぶやきと信頼(41~59節)
- (5) 棄教と忍耐(60~71節)

今回は、(1)と(2)を取り上げる。

3. 結論: イエスの7つの自己宣言

イエスの3番目の説教を通して、イエスとは誰かを確認する。

I. 肉的動機と霊的動機(22~29節)

1. 22~24節

「その翌日、湖の向こう岸にいた群衆は、そこには小舟が一隻あっただけで、ほかにはな

かったこと、また、その舟にイエスは弟子たちといっしょに乗られないで、弟子たちだけが行ったということに気づいた。しかし、主が感謝をささげられてから、人々がパンを食べた場所の近くに、テベリヤから数隻の小舟が来た。群衆は、イエスがそこにおられず、弟子たちもいないことを知ると、自分たちもその小舟に乗り込んで、イエスを捜してカペナウムに来た」

- (1) イエスが与えるパンを食べた人々は、イエスに注目した。
 - ①舟が一隻しかなく、弟子たちだけがその舟で西岸に向かうのを見ていた。
 - ②イエスが山に上るのを見た。
 - ③イエスはまだ付近にいたと思っていたが、そうではないことに気づいた。

- (2) そこで、イエスを捜すために西側に移動した。
 - ①ちょうど、テベリヤから数隻の小舟が入って来た。
 - ②それに乗って、カペナウムに移動した。
 - ③彼らは、イエスを熱心に探した。もっと多くのパンをもらおうとした。

2. 25 節

「そして湖の向こう側でイエスを見つけたとき、彼らはイエスに言った。『先生。いつここにおいでになりましたか』」

- (1) イエスがなぜカペナウムにいるのか、不思議であった。
 - ①いつ、どのようにして、カペナウムに移動したのか、知りたかった。

- (2) イエスは、その質問には答えない。
 - ①水上歩行は、弟子訓練のための私的「しるし」であった。
 - ②群衆は、イエスを強引に王に祭り上げようとしていた。
 - ③このままでは、イエスの主張は群衆の熱狂的な動きの中に埋没してしまう。
 - ④そこでイエスは、明確に真理を教える。非常にストレートな教えである。
 - ⑤この教えは、カペナウムの会堂で語られたものである。

3. 26～27 節

「イエスは答えて言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです』」

- (1) 「まことに、まことに、あなたがたに告げます」

- ①「アーメン、アーメン」という言葉が2回、文章の最初に出てくる。
- ②この説教の中では、この表現は4回も使われている。

*6:26、32、47、53

(2) イエスは、人々が肉的動機で動いていることを指摘した。

- ①彼らは、「しるし」の意味を考えることをしなかった。

*イエスはメシアであり、創造主である。

- ②単にパンを食べて満腹したので、もっとパンをもらうためにイエスを捜した。

- ③彼らが求めていたのは、パンと政治的解放を与えてくれる預言者モーセである。

(3) 「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい」

- ①労働を否定しているのではない。それが人生のゴールになってはいけない。

- ②これは、比喩的言葉である。

*朽ちる食物と永遠のいのちに至る食物の対比がある。

*それは、肉的動機と霊的動機の対比でもある。

- ③永遠のいのちに至る食物とは、霊的食物、神のことばである。

- ④人の子(メシアである自分)が与えるのは、後者である。

- ⑤人の子は、父なる神の認証を受けて活動している。

*シールやラベルの役割

4. 28節

「すると彼らはイエスに言った。『私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか』」

(1) 「働き」というキーワードを中心に議論が回る。

- ①ユダヤ教は、義なる業を強調した。

- ②ユダヤ人の習性は、「業による救い」を求めることである。

- ③ここで人々は、何をしたら神に喜ばれるかと問うている。

- ④自分には、神を喜ばせる業ができるとの思い込みがある。

- ⑤「業による救い」は、人間には心地よいものである。

(2) ロマ10:2~4

「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。キリストが律法を終わらせられた

ので、信じる人はみな義と認められるのです」

5. 29節

「イエスは答えて言われた。『あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです』」

(1) イエスは、たったひとつの神のわざを指摘した。

- ①それは、「神が遣わした者を信じること」である。
- ②自分の無力を知り、それを認めること。
- ③そして、イエスを救い主として信じること。
- ④ここで教えられているのは、信仰による救いである。

(2) ロマ6:23

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」

- ①罪という主人に仕えるなら、報酬として死が与えられる。
- ②永遠のいのちは、神からの賜物(プレゼント)である。

*主キリスト・イエスを信じることで、その贈り物を受け取ることである。

II. 古いマナと新しいマナ(30~41節)

1. 30~31節

「そこで彼らはイエスに言った。『それでは、私たちが見てあなたを信じるために、しるしとして何をしてくださいますか。どのようなことをなさいますか。私たちの父祖たちは荒野でマナを食べました。「彼は彼らに天からパンを与えて食べさせた」と書いてあるとおりです』」

(1) 人々の邪悪な心が見える。

- ①イエスは数々の「しるし」を行われた。
- ②5000人のパンの奇跡を行われた。
- ③その翌日、人々は何もなかったかのように、さらに「しるし」を求めた。
- ④自分たちの要求を満たすために、イエスを操ろうとしている。
- ⑤見たら信じてやるという提案であるが、これは逆である。
- ⑥信じる→見えるようになる。見る→信じる、ではない。

(2) 人々は、詩78:24~25を引用した。

「食べ物としてマナを、彼らの上に降らせ、天の穀物を彼らに与えられた。それで人々

は御使いのパンを食べた。神は飽きるほど食物を送られた」

(3) 人々は、イエスよりもモーセの方が偉大だと考えた。

①モーセは、40年間、イスラエル民族を養った。

*イエスは5000人をたった一度養っただけだ。

②モーセは、天からのパンを与えた(マナ)。

*イエスはすでに地上に存在しているパンを増やしただけだ。

2. 32～33節

「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです』」

(1) ユダヤ人の3つの誤解を解く。

①マナを与えたのはモーセではなく、「わたしの父」である。

*「わたしの父」とは、イエスの神性宣言である。

②父は今も、パンを与えておられる。

③父が今与えるパンは、「天からのまことのパン」である。

*旧いマナは、肉体を養うためであり、一時的なものである。

*新しいマナは、魂を養い、永遠のいのちを与える真の食物である。

(2) イエスの自己啓示

①天から下って来た「神のパン」とは、イエスのことである。

②イエスはモーセよりも偉大である。

③イエスは荒野のマナよりも偉大である。

④旧いマナは、イスラエル民族の肉体的生存を可能にした。

⑤新しいマナは、全人類に永遠のいのちを与えるものである。

3. 34～35節

「そこで彼らはイエスに言った。『主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。』イエスは言われた。『わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません』」

(1) 霊的に盲目な人々

①彼らは、イエスが「神のパン」であることを理解しなかった。

②それで、「いつも、ただで食べられるパンが欲しい」と願ったのだ。

③サマリヤの女と似ている。

「先生。私が渴くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい」(ヨハ4:15)

④彼らには、真の信仰はない。

(2)「わたしがいのちのパンです」

①これは、イエスの神性宣言である。

②もし人がこの言葉を発したなら、その人は愚か者である。

*私たちは、自分の飢えや渴きを癒すことはできない。

*ましてや、全人類の飢えや渴きを癒すことなどできない。

結論：イエスの7つの自己宣言

1. ヨハ6:35

「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません」

2. 8:12

「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」

3. 10:7、9

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です」

「わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます」

4. 10:11

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」

5. 11:25

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」

6. 14:6

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」

7. 15:5

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」

「天から下ったパン(2)」

§ 076 ヨハ6:36~71

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①この箇所は、5000人のパンの奇跡が起こった日の翌日のことである。
- ②イエスは、カペナウムの会堂で群衆を教えた。
- ③ヨハネの福音書にはイエスの説教が7つ出てくる。その3番目のもの。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「人々が期待するメシア像に答えないイエスと、ガリラヤ伝道の崩壊」 (§ 76)

ヨハ6:22~71

2. アウトライン(対比)

- (1) 肉的動機と霊的動機(22~29節)
- (2) 古いマナと新しいマナ(30~35節)
- (3) 信じない者と父から招かれた者(36~40節)
- (4) つぶやきと信頼(41~59節)
- (5) 棄教と忍耐(60~71節)

*今回は、(3) ~ (5) を取り上げる。

*神学的内容が満載である。

3. 結論:

- (1) 神の選びと人間の責務について考える。
- (2) 「とどまる」という言葉の意味を学ぶ。
- (3) 弟子たちの姿から教訓を学ぶ。

イエスの3番目の説教を通して、イエスとは誰かを確認する。

Ⅲ. 信じない者と父から招かれた者(36~40節)

1. 36~37節

「しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと、わたしはあなたがたに言いました。父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません」

- (1) 30節で、不信仰なユダヤ人たちは、信じるためにさらに「しるし」を求めた。
 - ①モーセが与えたマナ以上の「しるし」を要求した。

- ②彼らはイエスを操っていたのである。ただのパンを得ようとした。
- ③しかしイエスは、ご自分こそ最高の「しるし」であると言われた。
- ④彼らの前に、罪のない完ぺきな人間が立っていた。
- ⑤もしその「しるし」を見て信じないなら、何を見ても信じないだろう。
- ⑥問題は、「しるし」が不足していることではなく、心が頑ななことである。

(2) イエスは、彼らの不信仰の究極的原因を指摘された。

- ①結局は、父なる神が子なる神に与えた者だけが、イエスのもとに来る。
- ②イエスのもとに来た者は、拒否されることがない。
 - *ここには、「神の選びの教理」がある。
 - *と同時に、「人間の責務」も語られている。

2. 38～39 節

「わたしが天から下って来たのは、自分のところを行うためではなく、わたしを遣わした方のみところを行うためです。わたしを遣わした方のみところは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです」

(1) イエスは、自分は地から出たのではなく、天から下って来たと言った。

- ①その目的は、父の御心を行うためである。
- ②イエスの心と父の心とは、完全に調和していた。

(2) 父の御心とは何か。

- ①父が与えてくださったすべての者を最後まで守る。
 - *ここには、「永遠の保証」の教理がある。
- ②ひとりひとりを終わりの日によみがえらせる。
 - *ここには、「携挙」の約束がある。

3. 40 節

「事実、わたしの父のみところは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます」

(1) すでに語ったことの繰り返し

- ①子を見て信じる者は、みな永遠の命を持つ。
 - *聖書の中で最も簡潔に、「信仰による救い」を教えている箇所である。
- ②信じた者をひとりひとり終わりの日によみがえらせる。

IV. つぶやきと信頼(41～59節)

1. 41～42節

「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から下って来たパンである』と言われたので、イエスについてつぶやいた。彼らは言った。『あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている、そのイエスではないか。どうしていま彼は「わたしは天から下って来た」と言うのか』」

- (1) ユダヤ人たちは、先祖たちが荒野でつぶやいたように、つぶやいた。
 - ①つぶやきの原因は、イエスが自分の出自を天から下ったものだと宣言したから。
 - ②この宣言が重大なものであることを、彼らは認識した。

- (2) 彼らは論理的に思考を展開している。
 - ①イエスはヨセフの子である。
 - ②自分たちは、その父も母も知っている。
 - ③イエスの出自は地上的なもので、天的なものではない。

- (3) 彼らには盲点があった。
 - ①彼らは、イエスの処女降誕を信じなかった。
 - ②彼らは、イエスの受肉を信じなかった。
 - ③イエスの処女降誕を否定するなら、聖書の救いの構造が崩壊する。
 - ④今も、イエスの受肉を信じないために、信仰の闇にいる人がいる。

2. 43～44節

「イエスは彼らに答えて言われた。『互いにつぶやくのはやめなさい。わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます』」

- (1) イエスは、彼らがつぶやいているのを知っておられた。
 - ①つぶやきを叱責しておられる。
 - ②つぶやけばつぶやくほど、不信仰の闇に落ちて行く。

- (2) 神による選びの再確認
 - ①父がその人に語りかけ、その人を引き寄せる。
 - ②その人は、イエスのもとに来る。
 - ③イエスは終わりの日にその人をよみがえらせる。

3. 45～46節

「預言者の書に、『そして、彼らはみな神によって教えられる』と書かれていますが、父から聞いて学んだ者はみな、わたしのところに来ます。だれも父を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです」

(1) 父の選び(恵み)による救いを証明するために、イザ54:13を引用している。

- ①「預言者の書」とはイザヤ書である。
- ②しかし、旧約聖書の預言書はすべて、同じ真理を教えている。
- ③神は選んだ者を引き寄せ、その者に語りかける。

(2) 神を見た者はいないが、神はみことばを通して語りかける。

- ①啓示されたみことばを通して、語りかける。
- ②受肉したみことばを通して、語りかける。

(3) ここでも、神の選びと人間の責務が、ともに教えられている。

4. 47～48節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。わたしはいのちのパンです」

(1) この箇所は、イエスの教えの要約である。

- ①「まことに、まことに」が登場する。

(2) 「信じる者は永遠のいのちを持ちます」

- ①「信じる」は現在分詞。継続した信仰。
- ②「永遠のいのちを持つ」も現在形。すでに持っている。継続したいのち。

(3) 「わたしはいのちのパンです」

- ①永遠のいのちの根拠

5. 49～50節

「あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです」

(1) 「あなたがたの父祖たち」

- ①イエスは、ご自分を罪ある人間と区別しておられる。

(2) マナといのちのパンの対比

- ①マナを食べた人たちは、荒野で死んだ。
- ②いのちのパンを食べる人たちは、死ぬことがない。
 - *肉体の死を通過しても、魂は生きている。
 - *終わりの日に肉体が復活する。
 - *その肉体を持って永遠の世界に住むようになる。

6. 51 節

「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です」

- (1) このパンを食べるとは、聖餐式のことではない。
 - ①聖餐式はそれよりも1年後に与えられたものである。
- (2) これは、比喩のことばである。
 - ①このパンを食べるとは、イエスを信じることである。
 - ②イエスは贖罪の死を預言しておられる。
 - ③全人類のための死であることが預言されている。

7. 52 節

「すると、ユダヤ人たちは、『この人は、どのようにしてその肉を私たちに与えて食べさせることができるのか』と言って互いに議論し合った」

- (1) イエスの教えは、比喩的なものである。
 - ①信仰のない人には理解できない。
 - ②信仰のある人は、さらに深く真理を知るようになる。
- (2) 彼らの思考は、地上的で物質的な領域から外に出ない。
 - ①イエスは、物質的なものを用いて、霊的真理を教えておられた。
 - ②見たら信じてやるというアプローチは、無効である。
 - (例話) 飛行機から飛び降りないと、パラシュートは開かない。

8. 53～59 節

「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わた

しも彼のうちにとどまります。生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。これは天から下って来たパンです。あなたがたの父祖たちが食べて死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます』。これは、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである」

(1) 非常に重要な啓示である。4回目の「まことに、まことに」が出ている。

①肉を食べるも、血を飲むも、比喩のことばである。

②ユダヤ人たちは、血を食べてはならないと命じられていた。

*レビ3:17、17:10~14

③彼らは、衝撃を覚えた。

④イエスの死が贖罪の死であることを受け入れれば、疑問は解ける。

⑤共観福音書の最後の晩餐の場面で、イエスは再びこの比喩を用いておられる。

(2) 健全な食物と飲み物は、肉体の健康を支える。

①それと同じように、イエスに信頼することは霊的健康の秘訣である。

(3) この説教は、カペナウムの会堂で語られたものである。

①説教の要約は、マナを食べても死んだが、命のパンを食べるなら永遠のいのちが与えられる。

V. 棄教と忍耐 (60~71 節)

1. 60 節

「そこで、弟子たちのうちの多くの者が、これを聞いて言った。『これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか』」

(1) 12使徒以外にも、多くの者がイエスの弟子になっていた。

①彼らの多くが、イエスのことばにつまずいた。

2. 61~66 節

「しかし、イエスは、弟子たちがこうつぶやいているのを、知っておられ、彼らに言われた。『このことでああなたがたはつまずくのか。それでは、もし人の子がもといた所に上るのを見たら、どうなるのか。いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。しかし、あなたがたのうちには信じない者がいます。』——イエスは初めから、信じない者がだれであるか、裏切る者がだれであるかを、知っておられたのである——そしてイエスは言われた。『そ

れだから、わたしはあなたがたに、「父のみこころによるのでないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできない」と言ったのです。こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエスとともに歩かなかった」

(1) イエスは弟子たちのつぶやきを知っておられた。

- ①天から下ったという主張
- ②肉を食べ、血を飲むという教え
- ③それなら、御子の復活と昇天の出来事はもっと信じられないだろう。
- ④イエスのことばは、御霊によってしか理解することができない。

(2) イエスの知識

- ①弟子たちの中で誰が信じない者であるかを知っておられた。
- ②誰が裏切り者であるかを知っておられた。

(3) イエスは、弟子たちのプライドを粉碎された。

- ①業による救いは不可能である。
- ②父に招かれた者だけが、信仰によって救われる。
- ③この時点で、多くの者がイエスから離脱して行った。
- ④イエスは、弟子たちの信仰をふるいにかけておられたのだ。
- ⑤イエスを王にしようとする運動は、ここで終わった。

3. 67 節

「そこで、イエスは十二弟子に言われた。『まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう』」

(1) イエスの質問は、12 弟子の弱い信仰を励ますためのものである。

- ①彼らもまた、イエスのことばをすべて理解したわけではなかった。
- ②彼らがそれを理解するのは、イエスの復活後のことである。

4. 68～69 節

「すると、シモン・ペテロが答えた。『主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています』」

(1) ペテロがスポークスマンである。

- ①イエスだけが永遠のいのちについて教えてくれた。
- ②イエス以外にそれを教える人はいない。

(2) 「私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」

- ① 「私たち」と言っている。
- ② 信じる。 → 知っている。

5. 70～71 節

「イエスは彼らに答えられた。『わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとりには悪魔です。』」イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子のひとりであったが、イエスを売ろうとしていた」

- (1) イエスはペテロの確信を修正された。
 - ① イエスが12人を選んだ。
 - ② しかし、そのうちのひとりには悪魔の手先である。
- (2) イスカリオテのユダの裏切りは、この時から始まった。

結論：

1. 神の選びと人間の責務について考える。

- (1) 神による選びと永遠の保証は、イエスの教えの中に明確に存在する。
 - ① 父が救われる人を選び、その人に語りかけるのである。
 - ② その人は、イエスのもとにやって来る。
 - ③ イエスはその人を守り、復活の命を約束する。
 - ④ イエスはご自身のもとにやって来る人を一人の失うことはない。
 - ⑤ 滅びるように選ばれているという教えは、聖書にはない。

(2) 人間の責務もまた、イエスの教えの中に明確に存在する。

- ① 人は、信仰によってイエスのもとに来なければ救われない。

(例話) 人々の前で伝道メッセージを語る理由

- * 神による選びがあるから。結果に関して心配すべきではない。
- * 人間の責務があるから。

2. 「とどまる」という言葉の意味を学ぶ。

(1) ヨハ6:56～57

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きている

ように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです」

- ①キリストを信じる者とキリストとは、互いのうちにとどまる。
- ②ギリシア語で「メノウ」である。
- ③ヨハネの福音書では、非常に重要な神学用語である。

(2) ヨハ14:10

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです」

- ①父と子は、互いのうちにとどまる。

(3) ヨハ1:32

「またヨハネは証言して言った。『御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました』」

- ①子と御霊は、互いのうちにとどまる。

(4) 私たちへの適用

- ①イエスを信じる者は、三位一体の神のうちにとどまるのである。

3. 弟子たちの姿から教訓を学ぶ。

(1) イエスの比喩的教えの目的

- ①弟子たちの信仰をふるいにかけた。
- ②12使徒の弱い信仰を励ました。

(2) ヨハ6:68

「すると、シモン・ペテロが答えた。『主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます』」

- ①弟子たちはすべて理解したわけではない。
- ②しかし、信じることを選んだ。
- ③その結果、イエスの死、埋葬、復活、昇天を目撃する者となった。

(3) 理解したから信じるのではなく、信じたから理解できるようになるのである。

「清めに関する論争」

§ 077 マコ7:1~23、マタ15:1~20、ヨハ7:1

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① イエスはガリラヤに留まっていた(ヨハ7:1)

「その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡りたいとは思われなかったからである」

② 口伝律法を巡る論争

③ すでにいくつかの口伝律法がイエスによって否定されていた。

*安息日の癒し

*度重なる断食

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「エルサレムから下って来たパリサイ人たちがイエスを非難する」 (§ 76)

マコ7:1~23、マタ15:1~20、ヨハ7:1

*マタイはユダヤ人に向かって書いているので、簡潔である。

*マルコはローマ人(異邦人)に向かって書いているので、詳細に解説している。

2. アウトライン

(1) パリサイ人たちの質問(1~5節)

(2) イエスの回答(6~15節)

(3) 弟子たちの質問(17節)

(4) イエスの回答(18~23節)

3. 結論:

(1) ペテロの体験

(2) 口伝律法が誕生する理由

清めに関する論争を通して、真の信仰とは何かを確認する。

I. パリサイ人たちの質問(1~5節)

1. 1~2節

「さて、パリサイ人たちと幾人かの律法学者がエルサレムから来ていて、イエスの回りに集まった。イエスの弟子のうちに、汚れた手で、すなわち洗わない手でパンを食べている者があるのを見て、」

(1) パリサイ人たちと律法学者

- ①エルサレムから3日の旅をして、イエスのもとに来た。
- ②恐らくカペナウムであろう。
- ③目的は、イエスを問い詰め、罠にかけるため。

(2) 彼らが見たもの

- ①イエスの弟子のうちに、汚れた手でパンを食べている者がいた。
- ②これは、清めの儀式のことである。
- ③彼らの目は、批判的な目である。

(例話) 80点取った子に、20点足りないと言うか、80点も取ったというか。

2. 3～4節

「——パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事をせず、また、市場から帰ったときには、からだをきよめてからでないと食事をしない。まだこのほかにも、杯、水差し、銅器を洗うことなど、堅く守るよう

に伝えられた、しきたりがたくさんある——」

(1) 「昔の人たちの言い伝え」とは、口伝律法のことである。

- ①彼らは、モーセの律法を破っているという理由でイエスを批判したことはない。
- ②論争のテーマは、常に口伝律法である。
- ③「昔の人たちの言い伝え」=口伝律法=ミシュナ

(2) パリサイ人たちは、新しい規則を民に課すことに喜びを覚えていた。

- ①民は、それに従順に従っていた。
- ②紀元1世紀、口伝律法はモーセの律法以上のものと見なされるようになった。
「わが子よ、モーセの律法よりも、ラビたちの言葉により注意を払いなさい」
「聖書のことばを学ぶことは、よくも悪くもない。しかし、ミシュナを学ぶことはよい習慣であり、神からの報酬をもたらす」
- ③紀元3世紀、ミシュナは成文法となる。
- ④タルムード=ミシュナ+ゲマラ

(3) マルコは、口伝律法の中にある清めの儀式に言及している。

- ①清めの儀式は、前1世紀に、シャマイ学派とヒレル学派によって体系化された。
- ②手を洗う場合は、指先から肘まで洗う。
- ③一粒の種を食べる場合でも、これを行う。
- ③そうでない場合は、汚れた食物を食べたのと同じことになる。

- ④また、殺人や遊女と交わったことと同じになる。
- ⑤もし近くに水がないなら、最大4マイルまで歩け。

3. 5節

「パリサイ人と律法学者たちは、イエスに尋ねた。『なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか』」

- (1) 弟子たちの罪は、先生の罪である。
 - ①口伝律法を破っているという理由で、イエスと弟子たちは非難されている。
 - ②旧約聖書の中には、食前に手を洗えという律法はどれくらいの数あるか。

II. イエスの回答 (6～15節)

1. 6～8節

「イエスは彼らに言われた。『イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。「この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。」あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている』」

- (1) イエスは、口伝律法は偽善の教えであるとした。
 - ①イザ 29 : 13 の引用
 - ②口先では神を敬う。
 - ③心は、神から遠く離れている。
- (2) 人間の言い伝えを、神の教えの上に置いている。
 - ①神の戒めを捨てている。
 - ②人間の教えを教えている。

2. 9～13節

「また言われた。『あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたものです。モーセは、「あなたの父と母を敬え」、また「父や母をののしる者は死刑に処せられる」と言っています。それなのに、あなたがたは、もし人が父や母に向かって、私からあなたのために上げられる物は、コルバン(すなわち、ささげ物)になりました、たとえば、その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。こうしてあなたがたは、自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のことばを空文にしています。そして、これと同じようなことを、たくさんしているのです』」

(1) 偽善の例として、十戒の第5戒が破られていることを指摘する。

- ① 両親を敬うこと
- ② 「コルバン」とは、ヘブル語のラビ用語である。
- ③ 「コルバン」と言えば、神に捧げられたものとなる。
 - * 神殿に捧げる。
 - * 自分のために用いる。
 - * しかし、他の人の私的 necessary のために用いてはならない(両親も含めて)。

(2) これと同じようなことを、たくさんしている。

- ① 安息日の規定に関して
- ② 「安息日の道のりほどの距離」(使1:12)とは、約900メートル。
- ③ 僕を荷物と共に先に遣わし、いくつかの地点に配置しておく。
- ④ この方法で、いくらでも移動できた。

(3) マタ15:13~14で、パリサイ主義の本質が語られている。

「わたしの天の父がお植えにならなかった木は、みな根こそぎにされます。彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです」

- ① 父が植えなかった木であるので、根こそぎにされる。
- ② 盲人を手引きする盲人である。
- ③ ふたりとも穴に落ち込む。

* 紀元70年のエルサレム崩壊

3. 14~15節

「イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。『みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。外側から人に入って、人を汚すことのできる物は何もありません。人から出て来るものが、人を汚すものなのです』」

(1) 汚れは、「アウトサイド・イン」ではなく、「インサイド・アウト」である。

- ① 16節はない。写本の問題。

III. 弟子たちの質問(17節)

1. 17節

「イエスが群衆を離れて、家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた」

(1) 弟子たちは、イエスの教えを理解しなかった。

(2) マタ 15 : 15

「そこで、ペテロは、イエスに答えて言った。『私たちに、そのたとえを説明してください』」

①ペテロも理解しなかった。

IV. イエスの回答 (18~23 節)

1. 18~19 節

「イエスは言われた。『あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人に入って来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。』イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた」

(1) 外から入った物は、腹に入り、外に出される。

①人の心には入らない。

②食事の前に手を清めることは、無意味な儀式である。

(2) 「イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた」

①これは、将来すべての食物がコシェル(清浄食物)とされることの予告である。

②これは、最後の晩餐の席でイエスが紹介される新しい契約の予告である。

③イエスを信じた者は、旧約聖書の食物規定から自由にされている。

2. 20~23 節

「また言われた。『人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです』」

(1) 新共同訳

「更に、次のように言われた。『人から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである』」

(2) 内側にある「悪い思い」が、言葉や行為となって表れてくる。

①合計12のものがリストアップされている。旧約聖書の匂いがする。

②前半の6つは、複数形の名詞である。

「みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意」

*具体的行為

③後半の6つは、単数形の名詞である。

「詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別」

*心の在り方

(3) 人生のすべてに通じる真理である。

(例話) DVの傾向のある人の矯正

結論：

1. ペテロの体験

(1) イエスの答えの意味がまだ分かっていなかったようである。

(2) 使10:10~16

「すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとり夢ごちになった。見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。そして、彼に、『ペテロ。さあ、ほふって食べなさい』という声が聞こえた。しかしペテロは言った、『主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。』すると、再び声があつて、彼にこう言った。『神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。』こんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた」

(3) ペテロは、モーセの律法が生活の規範である時代は終わったことを知った。

(4) 新約時代は、ユダヤ人も異邦人も信仰と恵みによって救われる時代である。

2. 口伝律法が誕生する理由

(1) 忠実に神のことばを教えるラビが登場する。

(2) そのラビは、人々の信頼を得る。

(3) そのラビは、次第に神のことばを薄めたり、混ぜ物をしたりする。

(4) 人々はなんでも言うことを聞くので、最後はやりたい放題になる。

(5) 指導者に従う人たちには、責任がある。

①新しい教えが出て来たときに、それをみことばに従って吟味する。

②指導者が神のみこころに沿って奉仕するように、祈り支える。

「カナン人の女の信仰」

§ 078 マコ 7 : 24~30、マタ 15 : 21~28

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① 弟子訓練が続いている。
- ② イエスはユダヤには上らず、ガリラヤに留まっていた(ヨハ 7 : 1)。
- ③ きょうの箇所では、ツロとシドンの地方に立ち退かれた。異邦人の地。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「第2回目の退修でツロとシドン地区へ：スロ・フェニキアの女の娘の癒し」 (§ 78)

マコ 7 : 24~30、マタ 15 : 21~28

2. アウトライン

前置き：歴史的文脈 (21 節)

- (1) 起：カナン人の女の登場 (22 節)
- (2) 承：イエスの沈黙 (23~24 節)
- (3) 転：カナン人の女の信仰 (25~27 節)
- (4) 結：女の娘の癒し (28 節)

3. 結論：この女の信仰

カナン人の女の信仰から正しい神学を学ぶ。

前置き：歴史的文脈 (21 節)

1. 21 節

「それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ち退かれた」 (21 節)

- (1) ツロとシドンの地方は、今のレバノンである。
 - ① この地方は約束の地の一部であるが、イスラエルはここを所有したことがない。
 - ② イエスはユダヤ人の地域を去って、異邦人の地域に行かれた。
 - ③ イエスの評判は、この地方にも伝わっていた。
「だれにも知られたくないと思われたが、隠れていることはできなかった」
(マコ 7 : 24)

2. 旧約聖書に登場するこの地方の2人の女性に注目しよう。

(1) イゼベル

「彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであった。それどころか彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとり、行ってバアルに仕え、それを拝んだ」(1列16:31)

- ①オムリの子アハブは、イゼベルと結婚し、バアル礼拝をイスラエルに導入した。
- ②預言者エリヤは、カルメル山頂でバアルの預言者450人と戦った。
- ③カルメル山は、フェニキアと北王国の国境にある。

「アハブは、エリヤがしたすべての事と、預言者たちを剣で皆殺しにしたこととを残らずイゼベルに告げた。すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った。『もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。』彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去った」(1列19:1~3a)

- ①エリヤは、イゼベルを非常に恐れた。
- ②イスラエル最南端の町ベエル・シェバまで逃れた。

(2) ツアレファテのやもめ

「しかし、しばらくすると、その川がかれた。その地方に雨が降らなかったからである。すると、彼に次のような【主】のことばがあった。『さあ、シドンのツアレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしは、そこのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている』」(1列17:7~9)

- ①エリヤは、このやもめによって養われた。

3. これから登場する女がどちらに似ているかを考えながら、読み進もう。

I. 起：カナン人の女の登場(22節)

1. 22節

「すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。『主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです』」(22節)

(1) カナン人の女

- ①「この女はギリシヤ人で、スロ・フェニキアの生まれであった」(マコ7:26)
- ②カナン人には少なくとも10種類の区分があった。
- ③スロ・フェニキア人は、その中のひとつである。

(2) マタイの福音書の読者に与える印象

- ①カナン人は、旧約時代のイスラエルの敵の中で最も道徳的に墮落した民。
- ②ヨシュアの軍勢は、神がカナン人を裁く器として用いられた。
- ③カナン人の中には、北方に移動してツロ、シドンに定住する者が多くいた。
- ④イエス時代のユダヤ人たちは、サマリヤ人に対するのと同様に、カナン人に対しても偏見を持っていたであろう。

(3) この女の叫び

「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです」

- ①「ダビデの子よ」とは、メシアの称号である。
- ②彼女は、イエスをイスラエルのメシアと認めて、娘の癒しを求めている。

II. 承：イエスの沈黙 (23～24 節)

1. 23 節

「しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。そこで、弟子たちはみもとに来て、『あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです』と言ってイエスに願った」(23 節)

(1) イエスは沈黙しておられる。

- ①その理由は、後で明らかになる。

(2) 弟子たちの願い。

- ①女の願いを聞き届けてやってほしい。
- ②そうでないと、いつまでも叫びながらあとについて来るから。

2. 24 節

「しかし、イエスは答えて、『わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません』と言われた」(24 節)

(1) この女は異邦人である。

- ①彼女は、イエスがイスラエルのメシアであるという信仰によってイエスに近づいている。
- ②しかし、異邦人の彼女は、イスラエルに与えられている約束の受け手ではない。
- ③イエスは彼女の信仰をテストしている。

(2) イエスの奉仕の原則は、エゼキエル書の預言に基づいたものである。

「わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは正しいさばきをもって彼らを養う」(エゼ34:16)

「【主】であるわたしが彼らの神となり、わたしのしもべダビデはあなたがたの間で君主となる。【主】であるわたしがこう告げる」(エゼ34:24)

①パリサイ人たちはイエスを拒否したが、ユダヤ人たちは依然として「イスラエルの家の失われた羊」なのである。

Ⅲ. 転：カナン人の女の信仰(25～27節)

1. 25節

「しかし、その女は来て、イエスの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください」と言った」(25節)

(1) 女の呼びかけが、「主よ。私をお助けください」に変わった。

①「ダビデの子よ」という呼びかけがふさわしくないことを理解した。

②今度は、創造主である方に、被造物として願っている。

2. 26節

「すると、イエスは答えて、『子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです』と言われた」(26節)

(1) 比喩的言葉の意味

①子どもたちとは、イスラエル人のことである。

②子犬とは、異邦人のことである。

③イスラエル人のために用意されている祝福を、異邦人に与えるのはよくない。

(2) 異邦人を軽蔑したことばではない。

①犬とは、ギリシア語でクオンである。

②子犬とは、ギリシア語でクナリオンである。ペットのことである。

(3) ここでイエスは、この女の信仰を引き出そうとしておられる。

①公生涯のこの段階では、信仰があることが癒しの条件である。

3. 27節

「しかし、女は言った。『主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます』」(27節)

(1) 女は信仰を発揮した。

- ①イエスのことばに反発せずに、その神学に同意した。
- ②また、機智に富んだ言葉を発した。
 - *子犬という言葉をもっと自分に有利なように用いた。
 - *神の恵みに信頼した。

IV. 結：女の娘の癒し (28 節)

1. 28 節

「そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。『ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。』すると、彼女の娘はその時から直った」(28 節)

- (1) イエスは彼女の信仰を称賛された。
 - ①弟子たちでさえ理解していない真理を、彼女は理解した。
- (2) イエスの権威が表れている。
 - ①瞬時の癒し
 - ②距離を乗り越えた癒し
 - ③今、神の右の座に着座しておられるイエスは、大祭司として奉仕しておられる。

結論：この女の信仰

1. 彼女は、イゼベル型ではなく、ツァレファテのやもめ型である。

「彼女は答えた。『あなたの神、【主】は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一握りの粉と、つぼにほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて、死のうとしているのです。』エリヤは彼女に言った。『恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それから後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい。イスラエルの神、【主】が、こう仰せられるからです。「【主】が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくなるならない。』」(1列 17:12~14)

- (1) イゼベルはイスラエル人を思いのままに操ろうとしたが、滅びた。
- (2) ツァレファテのやもめは、先ずエリヤにパンを与え、自分もパンを得た。

2. 彼女は、イエスの神学を理解し、それに同意した。

- (1) 「ダビデの子」というタイトルは、ダビデ契約を基にしたものである。
- (2) イエスは、ダビデ契約に基づいて王国をイスラエル人たちに提供された。
- (3) これは、イスラエル人に差し出された祝福であり、異邦のものではない。

3. 彼女は、神の恵みに信頼した。無意識的に、ダビデ契約よりも前に結ばれた契約に基づいてイエスに懇願した。

(1) アブラハム契約

「【主】はアブラムに仰せられた。『あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される』(創12:1~3)

(2) イザヤの預言

「主は仰せられる。『ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする』(イザ49:6)

4. 3種類の誤解

(1) 弟子たちの誤解

- ① サマリヤ人伝道への壁
- ② 異邦人伝道への壁

(2) ユダヤ人たちの誤解

- ① 自分たちにはユダヤ教がある(口伝律法の体系)。
- ② イエス・キリストは異邦人の神である。

(3) 異邦人の誤解

- ① ユダヤ人は見捨てられて、自分たちが霊的イスラエルになった。
(例話) 子犬が食卓の椅子に座っている姿
- ② この女の信仰は、理想的な異邦人の信仰の型である。
- ③ **ロマ11:17~18**

「もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです」

(例話) 昭和28年3月の赤子取り違え事件。60年後に発覚。

「耳が聞こえず、口のきけない人の癒し」

§ 079 マコ 7 : 31~37

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、弟子訓練のためにツロとシドンの地方に立ち退かれた。
- ② そこは異邦人の地。
- ③ カナン人の女が信仰を示し、娘を癒してもらった。
- ④ その続きで、イエスは依然として異邦人の地を移動している。
- ⑤ 異邦人の地で奇跡が起こる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「耳が聞こえず、口のきけない人の癒し。4千人のパンの奇跡」 (§ 79)

マコ 7 : 31~8 : 9

- ① 今回は、前半のみを取り上げる。

2. アウトライン

前置き：地理的情報 (31 節)

- (1) 人々の願い (32 節)
- (2) イエスが採用した6つのステップ (33~34 節)
- (3) その結果 (35~37 節)

3. 結論：

- (1) イエスのへりくだり
- (2) この癒しが象徴するもの

この癒しを通して、神とのコミュニケーションについて学ぶ。

前置き：地理的情報 (7 : 31)

「それから、イエスはツロの地方を去り、シドンを通って、もう一度、デカポリス地方のあたりのガリラヤ湖に来られた」

- (1) イエスの旅程 (地図参照)
 - ① ツロから北に、
 - ② シドンまで行って東に、
 - ③ ヘルモン山の南、ピリポ・カイザリヤ辺りからガリラヤ湖に向かって南下、

- ④ガリラヤ湖の東側のデカポリス地方に出る。
 - ⑤デカポリス地方の住民は主に異邦人であるが、ユダヤ人も多く住んでいた。
- (2) イエスはヘロデ・アンティパスの領地を注意深く避けている。
- ①ヘロデ・アンティパスは、バプテスマのヨハネを殺害した。
 - ②彼は、イエスが復活したバプテスマのヨハネではないかと恐れている。
 - ③イエスは、国主ピリポの領地を通過している(ガリラヤ湖の東部と北部)。
 - ④国主ピリポは、ヘロデ・アンティパスよりもまだましであった。
 - ⑤少なくとも、彼にはイエスに敵対する理由がなかった。
- (3) 2つの奇跡は、異邦人の地で行われる。

I. 人々の願い (32節)

「人々は、耳が聞こえず、口のきけない人を連れて来て、彼の上に手を置いてくださるよう、願った」

1. 「耳が聞こえず、口のきけない人」が登場する。
- (1) 彼自身が主体的に行動しているわけではない。
 - ①ユダヤ法では、彼のようなハンディを負った人は、律法の義務から除外されていた。
 - ②ただし、婦人、奴隷、知的障がい者、未成年者と同類と見なされた。
 - ③「律法を守るほどの教育を受けていない」との理由からであった。
 - (2) 「口のきけない人」
 - ①「舌の回らない人」(新共同訳)
 - ②ギリシア語で「mogilalos」。明瞭に話せないということ。
 - ③発声器官に問題があるか、耳が聞こえないので発音法を学べなかったか。
2. 人々は、「彼の上に手を置いてくださるよう、願った」
- (1) 人々は、癒しの方法をイエスに指示している。
 - (2) 人々は、魔術師が奇跡を行うのを見るのが好きだった。
 - ①彼らは、イエスの噂を聞いていた。
 - ②魔術師の奇跡を見るよりも、イエスが奇跡を行うのを見たかった。

II. イエスが採用した6つのステップ

1. 33節 a

「そこで、イエスは、その人だけを群衆の中から連れ出し、」

- (1) イエスはなぜこの人だけを群衆の中から連れ出したのか。
 - ① 一対一の対話を求めた。
 - ② 公生涯のこの時期、イエスは「しるし」によってご自身のメシア性を公に証明するということをしなくなっている。
 - ③ ヤイロの娘の癒し(マコ5章)も、私的空間で行われた。

2. 33b~34節

「その両耳に指を差し入れ、それからつばきをして、その人の舌にさわられた。そして、天を見上げ、深く嘆息して、その人に『エパタ』すなわち、『開け』と言われた」

- (1) イエスはなぜすぐにこの人を癒さなかったのか。
 - ① 公生涯のこの時期、イエスは信仰があることを条件に癒しをするようになった。
 - ② イエスがこの人を癒した方法は、この人の信仰を引き出すためのものであった。
 - ③ ユダヤ法では、耳と口が不自由な人であってもジェスチャーで会話が可能とされていた。
 - ④ イエスは、この人とジェスチャーで会話しながら癒しを行われた。

3. 癒しの6つのステップ

- (1) 両耳に指を差し入れた。
 - ① これから耳を開けてあげるというメッセージ

- (2) つばきをした。
 - ① 癒しは必ず起こるというメッセージ
 - ② 癒しの受け手にとっては大きな励ましとなった。

「彼らはベツサイダに着いた。すると人々が盲人を連れて来て、彼にさわってくださるよう、イエスに願った。イエスは盲人の手を取って村の外に連れて行かれた。そしてその両目につばきをつけ、両手を彼に当てて『何か見えるか』と聞かれた」(マコ8:22~23)

「イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。『行って、シロアム(訳して言えば、遣わされた者)の池で洗いなさい。』そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った」(ヨハ9:6~7)

- (3) その人の舌にさわられた。

- ①つばきをその人の舌につけた。
- ②舌のもつれが解けるというメッセージ

(4) 天を見上げた。

「するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた」
(マコ6:41)

- ①癒しは天からの恵みによるものだというメッセージ

(5) 深く嘆息した。

- ①罪とその結果に対する怒りであろう。

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日」(創1:31)

- ②イエスの嘆息は、すべての人の希望である。

(6) その人に「エパタ」すなわち、「開け」と言われた。

- ①これはアラム語である。
- ②魔術師は意味不明なおまじないの言葉を語る。
- ③その人は、イエスの唇を読んで、意味を理解した。

Ⅲ. 結果 (35～37 節)

1. 35 節

「すると彼の耳が開き、舌のもつれもすぐに解け、はっきりと話せるようになった」

- ①この人は瞬間的に癒された。
- ②イエスの権威が表れた。

2. 36 節

「イエスは、このことをだれにも言ってはならない、と命じられたが、彼らは口止めされればされるほど、かえって言いふらした」

- ①恐らく彼らは、ユダヤ人であろう。
- ②彼らは口止めされたが、かえって言いふらした。
- ③マタ9章のふたりの盲人の癒しの場合もそうであった。
- ④いかに良い動機であっても、それは神の御心に反している。

3. 37節

「人々は非常に驚いて言った。『この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない者を聞こえるようにし、口のきけない者を話せるようにされた』」

(1) メシア預言との関連

「そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ」(イザ35:6)

(2) 「口のきけない者」のギリシア語訳(七十人訳聖書)は、「mogilalos」である。

①新約聖書では、マコ7:32だけに出てくる。

②マルコは、イエスがメシアであることを伝えている。

③しかし、人々は本当に意味でイエスがメシアであることを理解していない。

結論:

1. イエスのへりくだり

(1) イエスは、この人と本当にコミュニケーションしようとした。

(2) イエスは、この人に分かる言語(ボディランゲージ)を用いられた。

(3) イエスが受肉したのは、私たち罪人とコミュニケーションするためであった。

2. この癒しが象徴するもの

はじめに: 比喩的読み方は、避けなければならない。

しかし、本文がそれを示唆している場合は、そのように読むのがよい。

(1) この癒しは、弟子たちの耳の癒しを象徴している。

①マコ8:18

「目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか」

②マコ8:27~30

「それから、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられた。その途中、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。『人々はわたしをだれだと言っていますか』。彼らは答えて言った。『バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます。』するとイエスは、彼らに尋ねられた。『では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。』ペテロが答えてイエスに言った。『あなたは、キリストです。』」

(2) この癒しは、私たちの耳の癒しを象徴している。

「4千人のパンの奇跡」

§ 079 マコ 8 : 1~9

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、異邦人の地を巡っておられる。
- ② カナン人の女は、娘を癒してもらった。
- ③ 耳が聞こえず、口のきけない人が癒された。
- ④ 4千人のパンの奇跡が起こる。

(2) パンの奇跡は2度あったか。

- ① マルコとマタイは、5千人のパンの奇跡と4千人のパンの奇跡に言及している。
- ② イエス自身が、2度のパンの奇跡に言及しておられる。
- ③ マコ 8 : 19~20

『わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。』彼らは答えた。『十二です。』『四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。』彼らは答えた。『七つです。』

④ マタ 16 : 9~10

「まだわからないのですか、覚えていないのですか。五つのパンを五千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。また、七つのパンを四千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか」

⑤ 聖書に向かう姿勢

* 聖書は正しいのだから、必ず答えが見つかるはずだと思え。

2. アウトライン

- (1) 必要の発生 (1~3 節)
- (2) 弟子訓練 (4~5 節)
- (3) パンの配給 (6~7 節)
- (4) 奇跡の結果 (8~9 節)

3. 結論 :

- (1) 2つのパンの奇跡の比較
- (2) 不信仰からの解放
- (3) 嫉妬からの解放

この奇跡を通して、イエスから弟子訓練を受ける。

I. 必要の発生 (1~3節)

1. 1節 a

「そのころ、また大ぜいの人の群れが集まっていたが、食べる物がなかったので、」

(1) 場所はデカポリス地方のあたり (マコ7:31)

① 群衆は、異邦人が中心である。

② なぜ多くの人々が集まったのか。

(2) ゲラサ人の地でレギオンを宿していた人の証し

「それでイエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人が、お供をしたいとイエスに願った。しかし、お許しにならないで、彼にこう言われた。『あなたの家、あなたの家族のところへ帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。』そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、デカポリスの地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた」(マコ5:18~20)

(3) 群衆は食べる物がなく、空腹になった。

2. 1節 b~3節

「イエスは弟子たちを呼んで言われた。『かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。空腹のまま家に帰させたら、途中で動けなくなるでしょう。それに遠くから来ている人もいます』」

(1) イエスの憐みの心

① イエスが主導権を握って、弟子たちに呼びかけた。

② 「かわいそうに」は、「スプランクニゾマイ」である。

③ 「この群衆のために私のはらわたは痛んでいる」という意味である。

(2) イエスの感受性

① 群衆は、食べ物よりも神のことばを慕った。

* いわば断食聖会のようなものである。

② 群衆は、三日間もイエスとともにいる。

③ 空腹のまま家に帰らせることはできない。

④ イエスは、遠くから来ている人もいることを知っておられた。

(3) マタ6:31~32

「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます」

- ①神は私たちの必要をすべてご存じである。
- ②必要でないものもご存じである。

II. 弟子訓練 (4~5 節)

1. 4 節

「弟子たちは答えた。『こんなへんぴな所で、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができますよう』」

- (1) 弟子たちは、過去の経験から学んでいない。
 - ①イエスがどのようなお方であるかについて、まだ目が開かれていない。
- (2) 弟子たちは、自らの無力を告白している。
 - ①間接的に、イエスに解決を求めている。

2. 5 節

「すると、イエスは尋ねられた。『パンはどれぐらいありますか。』弟子たちは、『七つです』と答えた」

- (1) イエスは、パンがどれぐらいあるかを問われた。
 - ①この質問によって、イエスは自らの意図を明確にされた。
 - ②弟子たちに、今持っているものを差し出すように示唆された。
- (2) パンは7つあった。
 - ①それに、魚が少しばかりあった。
 - ②「小さい魚が少しあった」(新共同訳)

III. パンの配給 (6~7 節)

1. 6~7 節

「すると、イエスは群衆に、地面にすわるようにおっしゃった。それから、七つのパンを

取り、感謝をささげてからそれを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。また、魚が少しばかりあったので、そのために感謝をささげてから、これも配るように言われた」

(1) 5千人のパンの奇跡とよく似ている。

①「弟子たちに与えた」という動詞だけが、継続した動作を表している。

②3つのステップ

*弟子たちは、持っているパンと魚を差し出した。

*イエスはそれを増やし、弟子たちに与えた。

*弟子たちは、それを群衆に配った。

(2) 「感謝をささげて」

①すべての良きものは、神から来ることを認める行為である。

IV. 奇跡の結果 (8~9節)

1. 8~9節

「人々は食べて満腹した。そして余りのパン切れを七つのかごに取り集めた。人々はおおよそ四千人であった。それからイエスは、彼らを解散させられた」

(1) 有り余るパンが与えられた。

①人々は食べて満腹した。

②余りのパン切れは7つのかごに一杯になった。

(2) 食べた人々の数はおおよそ4千人であった。

結論：

1. 2つのパンの奇跡の比較

(1) ユダヤ人 vs 異邦人

①異邦人が、イスラエルの神のもとに来ている。

②ユダヤ人はイエスを拒否したが、異邦人はイエスに引き寄せられた。

(2) 1日 vs 3日

①マコ6:35

②マコ8:2

(3) 5つのパンと2匹の魚 vs 7つのパンと少しの小魚

①マタ 14:17

②マコ 8:5、7

(4) 5千人の男+婦人と子ども vs 4千人の男+婦人と子ども

①マタ 14:21

②マタ 15:38

(5) 12のかごにいっぱい之余り物 vs 7つのかごにいっぱい之余り物

①マタ 14:20 (コピノスという名詞。複数形はコピノイ)

②マコ 8:8 (スプリスという名詞。穀物を貯蔵するかご)

*パウロはダマスコの城壁からかごに乗ってつり降ろされた (使9:25)。

2. 不信仰からの解放

(1) 弟子たちは、学ぶのがのろい。

①イエスがいかなる状況にあっても奇跡を行えることを信じなかった。

②5千人のパンの奇跡の記憶が、信仰を働かせる助けになっていない。

(2) 詩 103:2~5

「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、鷲のように、新しくなる」

①ビジネスマン：ヴィクトリーリスト

②クリスチャン：グレイスリスト

3. 嫉妬からの解放

(1) 塾生の感想

「中川先生のヘブル的視点による聖書解釈のメッセージを聴いて最初に霊の目を開かれたのは妻だった。それから我が家の神学論争が始まった。アーノルドのルームメイトのビルと同様の反応を私は示した。二千年に及ぶキリスト教神学の歴史の積み重ねはどうなる？それに基づいて学んできた僕の信仰は間違った信仰なのか？でも、実は神学や信仰のことはどうでもよくて、ユダヤ人のおこぼれが異邦人の僕にまわってきた、ということが受け入れられず、ユダヤ人がねたましく思えたのだ。そのゆがんだ気持ちを自分が受け入れたときから、私のヘブル的視点による聖書解釈の学びが始ま

った。聖書入門のコースを通じて、断片的だったヘブ林的視点による聖書解釈がとても整理されてきたと思う」

(2) カナン人の女は、パンくずを願った。

「主よ。そのとおりです。でも、食卓の下の小犬でも、子どもたちのパンくずをいただきます」(マコ7:28)

(3) 4千人が食べて満足し、パンの残りは7つのかごに一杯になった。

①5千人のパンの奇跡の時の12のかごよりも多くのパンが残った。

(4) ユダヤ人がイエスを拒否した今、恵みは異邦人に向かいつつある。

①イエスのご自身を諸国民に与えようとしておられる。

②イエスは命のパンである。

「徐々に目が開かれる弟子たち」

§ 080 マコ 8 : 10~12、マタ 15 : 39~16 : 4

§ 081 マコ 8 : 13~26、マタ 16 : 5~12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、異邦人の地を巡っておられる。
- ② カナン人の女は、娘を癒してもらった。
- ③ 耳が聞こえず、口のきけない人が癒された。
- ④ 4千人のパンの奇跡が起こった。

(2) § 80 と 81 を取り上げる。

- ① 一連の動きの中で、何が起きているかを理解する。
- ② ガリラヤ伝道が終わりに近づいている。

2. アウトライン

- (1) 湖の東岸から西岸に戻る (10~12 節)。
- (2) 舟で再び東岸に向かう (13~21 節)。
- (3) 東岸に到着する (22~26 節)。

3. 結論 :

- (1) 弟子たちの霊の目
- (2) ユダヤ人たちの霊の目
- (3) 私たちの霊の目

一連の動きを通して、霊の目を開いていただく。

I. 湖の東岸から西岸に戻る (10~12 節)。

1. 10 節

「そしてすぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマヌタ地方へ行かれた」

(1) 4千人のパンの奇跡の後

- ① 群衆を解散させた。
- ② すぐに弟子たちを舟に乗せ、西岸に向かった。
- ③ 東岸は異邦人の地、西岸はユダヤ人の地である。

(2) ダルマスタ地方

- ① マタ 15 : 39 では、「マガダン地方」となっている。
- ② マグダラのマリアの出身地、マグダラのことであろう。
- ③ ダルマスタは、ガリラヤ湖に面した港である。

2. 11～12 節

「パリサイ人たちがやって来て、イエスに議論をしかけ、天からのしるしを求めた。イエスをためそうとしたのである。イエスは、心の中で深く嘆息して、こう言われた。『なぜ、今の時代はしるしを求めるのか。まことに、あなたがたに告げます。今の時代には、しるしは絶対に与えられません』」

- (1) イエスがユダヤに行かなかったのは、命を狙われていたからである。
 - ① ガリラヤでも、ユダヤ人の地区を避けて異邦人の地区を巡回しておられた。
 - ② 主な目的は、弟子たちを訓練するためである。
 - ③ その過程では、異邦人を祝福する奇跡も起こった。

- (2) イエスがユダヤ人の地区に戻ると、すぐに攻撃がやって来た。
 - ① パリサイ人とサドカイ人がイエスを試した (マタ 16 : 1)。
 - ② 彼らは、「天からのしるし」を求めた。
 - ③ これは、癒し以上に劇的な奇跡のことである。

- (3) イエスの回答 (マタ 16 : 2～4)
 - ① 空模様の見分け方を知っていながら、時のしるしを見分けることができない。
 - * バプテスマのヨハネの奉仕
 - * イエスが行ってきた数々のしるし
 - * 異邦人が徐々に祝福を受けつつある。
 - ② イエスを拒否した指導者たちは、「悪い、姦淫の時代」である。
 - * 「時代」とは、「世代」のことである。
 - * 新共同訳は、「よこしまで神に背いた時代の者たち」と訳している。
 - ③ ヨナのしるし以外は与えられない。
 - * 三日目の復活

- (4) 神の恵みを無駄にしてはならない。

II. 舟で再び東岸に向かう (13～21 節)。

1. 13～14節

「イエスは彼らを離れて、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。弟子たちは、パンを持って来るのを忘れ、舟の中には、パンがただ一つしかなかった」

(1) イエスは突然そこを去られた。

- ①イエスの憤り、義憤が表現されている。
- ②ユダヤ人の地に戻ったばかりなのに、再度異邦人の地(東岸)に向かった。

(2) 弟子たちにぬかりがあった。

- ①当時のラビは、弟子たちに日常の作業を分担させていた。
- ②旅に必要な食糧を準備するのは、弟子たちの役割である。
- ③ところが、彼らはそれを忘れ、舟の中にはパンが一つしかなかった。

2. 15～16節

「そのとき、イエスは彼らに命じて言われた。『パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。』そこで弟子たちは、パンを持っていないということで、互いに議論し始めた」

(1) 「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」

- ①パン種とは、罪の象徴である。
- ②福音書では、特に「偽りの教え」のことである。
- ③パリサイ人のパン種
 - *イエスはベルゼブルの力によって奇跡を行っている。
- ④サドカイ人のパン種(マタ16:6)
 - *イエスは神殿での礼拝に反対している。
- ⑤ヘロデのパン種
 - *ヘロデ党の者たちは親ローマである。
 - *ヘロデの家を通したローマの支配を歓迎した。
 - *イエスはローマの支配に反抗している。
- ⑥私たちの信仰を破壊するのは、迫害ではなく、偽りの教理である。
(例話) 神学校に行くことの是非

(2) 弟子たちは、互いに議論し始めた。

- ①イエスの警告の中の「パン種」という言葉だけを聞いた。
- ②パンを持って来るのを忘れたという負い目があった。
- ③誰の責任かを論じ合った。

3. 17～18a 節

「それに気づいてイエスは言われた。『なぜ、パンがないとって議論しているのですか。まだわからないのですか、悟らないのですか。心が堅く閉じているのですか。目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか』」

(1) イエスの5つの質問

- ①なぜ、パンがないとって議論しているのですか。
- ②まだわからないのですか、悟らないのですか。
- ③心が堅く閉じているのですか。
- ④目がありながら見えないのですか。
- ⑤耳がありながら聞こえないのですか。

4. 18b～21 節

「『あなたがたは、覚えていないのですか。わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。』彼らは答えた。『十二です。』『四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。』彼らは答えた。『七つです。』イエスは言われた。『まだ悟らないのですか』」

(1) 記憶を呼び覚ます

- ①5千人のパンの奇跡
 - *5つのパンを裂いて上げた。
 - *パンの残りは、12のかごいっぱいになった。
- ②4千人のパンの奇跡
 - *7つのパンを裂いて上げた。
 - *パンの残りは、7のかごいっぱいになった。

(2) 弟子たちが警告の意味を理解しなかったことが問題なのではない。

- ①イエスがどのようなお方であるかが見えていないことが問題なのである。
- ②パンが一つあれば、イエスとともにいる12人には十分な量である。

Ⅲ. 東岸に到着する (22～26 節)。

1. 22 節

「彼らはベツサイダに着いた。すると人々が盲人を連れて来て、彼にさわってくださるよう、イエスに願った」

- (1) このベツサイダは、ガリラヤ湖東岸のベツサイダ・ユリアスである。

①異邦人の地である。

(2) 人々が盲人を連れて来た。

①イエスは、公の場では癒しを行わない。

②密かに癒しを行われる。

2. 23～26 節

「イエスは盲人の手を取って村の外に連れて行かれた。そしてその両目につばきをつけ、両手を彼に当てて『何か見えるか』と聞かれた。すると彼は、見えるようになって、『人が見えます。木のようにですが、歩いているのが見えます』と言った。それから、イエスはもう一度彼の両目に両手を当てられた。そして、彼が見つめていると、すっかり直り、すべてのものがはっきり見えるようになった。そこでイエスは、彼を家に帰し、『村に入っ
て行かないように』と言われた」

(1) 2段階の癒し(ここにだけ出てくる特殊な癒しである)

①盲人の信仰が弱いということではない。

②イエスの力が弱いということでもない。

(2) 第1段階

①両目につばきをつけ、両手を当てた。

②「何か見えるか」と聞いた。

③「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが見えます」

④見えたが、まだ不十分である。

(3) 第2段階

①もう一度両目に手を当てた。

②盲人が見つめていると、すっかり直り、すべてのものがはっきり見えるようになった。

(4) 村に入らないで家に帰れという命令を与えた。

結論：

1. 弟子たちの霊の目

(1) この段階では、イエスの教えを部分的に理解している。

(2) 彼らの霊の目は開いているが、まだ十分ではない。

(3) 教会時代になって完全に霊の目が開く。

(4) 内住の聖霊を体験して以降のことである。

2. イスラエルの民の霊の目

(1) イスラエルの民は、部分的に見える。

①イエスをメシアと信じている個人がいる。

②彼らは、イスラエルの残れる者である。

(2) 今も、イエスをメシアと信じるユダヤ人はいる。

①ユダヤ人が民族的に目が開かれるのは、大患難時代の最後の時である。

3. 私たちの霊の目

(1) 今知るところは一部である。

(2) 日本の国に対する神の計画はどうなるのか。

(3) 神の自分に対する計画はどうなるのか。

(4) 3つの「まん」を避ける。

①マンネリ

②慢心

③満足

「ペテロの信仰告白」

§ 82 マコ 8 : 27~30、マタ 16 : 13~20、ルカ 9 : 18~21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①弟子たちの霊の目が徐々に開かれつつある。
- ②イエスは、3つのパン種に注意するように警告を発した。
 - *福音書では、パン種は「偽りの教え」である。
- ③3つのパン種
 - *パリサイ人のパン種
 - *サドカイ人のパン種
 - *ヘロデのパン種
- ④イエスは、弟子たちが正しく理解したかどうかを試す。
- ⑤この箇所は、福音書の中の分岐点、分水嶺である。
 - *イエスが民衆から歓迎される時期は終わった。
 - *イエスは弟子たちの信仰を確認する。
 - *その上で、イエスは十字架に顔を向ける。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「ピリポ・カイザリヤの近郊で、イエスは弟子たちの信仰を試す」 (§ 82)

マコ 8 : 27~30、マタ 16 : 13~20、ルカ 9 : 18~21

2. アウトライン

- (1) 2つの質問 (13~16 節)
- (2) 教会設立の約束 (17~18 節)
- (3) 使徒としての特権の付与 (19~20 節)

3. 結論 : 3つの誤解

- (1) 人間の役割の誤解
- (2) ラビ用語の誤解
- (3) 教会の本質の誤解

イエスの公生涯の分水嶺について学ぶ。

I. 2つの質問 (13~16 節)

1. 状況説明

「さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、」(13節a)

(1) 名称

- ①「ピリポのカイザリヤ」という意味
- ②現在は、バニラスと呼ばれている。

(2) 地形と歴史

- ①ヨルダン川の4水源の一つバニラス川が発するヘルモン山南麓の高台。
- ②水源の一つである「泉の洞穴」には、パネイオン(パン神)の聖所があった。
- ③町の名はバニラス(アラビア語でバニラス)であった。
- ④前20年、ヘロデ大王は皇帝アウグストからこの町を与えられた。
- ⑤その子ヘロデ・ピリポが町を拡張美化し、皇帝テベリオに敬意を表してカイザリヤと改名。地中海のカイザリヤと区別するため、ピリポ・カイザリヤとした。
- ⑥ここは、自然神パンの偶像礼拝や皇帝崇拝が長い間行われていた場所である。

(3) イエスは、依然として異邦人の地を巡っておられる。

2. 最初の質問

「イエスは弟子たちに尋ねて言われた。『人々は人の子をだれだと言っていますか。』彼らは言った。『バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています』」(13b~14節)

(1) 自分に関する人々の評価を聞く質問

- ①客観的な内容なので、弟子たちには答えやすい。

(2) 広い範囲の可能性が示唆されている。

- ①バプテスマのヨハネ
- ②エリヤ
- ③エレミヤ
- ④預言者のひとり

(3) すべて不十分な回答である。

- ①イエスは、普通以上の人物であるが、唯一のお方ではないという回答である。
- ②しかし、イエスはメシアであり、神である。

3. 2つ目の質問

「イエスは彼らに言われた。『あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。』シモン・ペテロが答えて言った。『あなたは、生ける神の御子キリストです』(15～16節)

- (1) なぜこの質問を弟子たちにするのか。
 - ①ヨハネの弟子であった彼らは、イエスをメシアと信じたので従って来た。
 - ②しかし、イエスは当時一般的であったメシア像に合致する歩みはしなかった。
 - ③弟子たちの信仰は試されたが、それでも彼らは、イエスには神からの使命が与えられているとの確信を保っていた。

- (2) 「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」
 - ①「あなたがた」という言葉に強調がある。

“But you, who do you say that I am?”
 - ②この質問の重要性を見逃してはならない。

- (3) 「あなたは、生ける神の御子キリストです」
 - ①ギリシア語では、4つの定冠詞によって内容が強調された文である。
 - *The Messiah
 - *The Son
 - *of The God
 - *The Living One
 - ②イエスは、旧約聖書が預言する油注がれたお方である。
 - ③イエスにあつて、イスラエルの民の希望はすべて成就した。
 - ④イエスは、人間以上のお方、神ご自身である。
 - ⑤ペテロの回答は、弟子集団を代表したものである。

II. 教会設立の約束 (17～18節)

1. 17節

「するとイエスは、彼に答えて言われた。『バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です』(17節)

- (1) ペテロはイエスから祝福のことばを受けた。
 - ①イエスがどういうお方であるかを、ついに理解したからである。

- (2) しかし、この結論は人間的な思索や知恵によって到達したものではない。
 - ①彼は、パン種に関する警告に耳を傾けた。
 - ②父なる神の啓明があつたので、ペテロの目はイエスに対して開かれた。

2. 18節

「ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません」(18節)

(1) メシアへの信仰告白があったので、次に、メシアによる計画が啓示される。

①それは、教会設立の啓示である。

(2) イエスは初めてペテロに会った時、「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします」と言われた(ヨハ1:41~42)。

①今やペテロは、この信仰告白によって「岩」のように強くなった。

②イエスは、この日が来ることを知っておられた。

(3) 「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」

①ここで「教会」という語が初めて聖書に登場する。

②この語は、マタイの福音書だけに出てくる。

③未来形なので、この時点ではまだ教会は誕生していない。

④「岩」という言葉遊びに注目

*ペテロ(男性名詞ペテロス)は、小さな石である。

*ペトラ(女性名詞)は、巨大な岩盤である。

*この2つの言葉は、コントラストのために使用されている。

*信仰告白をしたペテロは小さな石であるが、教会の土台は巨大な岩である。

⑤カトリック教会は、この岩をペテロだと解釈する。

⑥文脈上は、この岩とは「イエスをメシアと認める信仰」であり、イエス自身である。

*旧約聖書では、岩はメシアの象徴である。

「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない」(イザ28:16)

*岩が人間の象徴として用いられている例はない。

(4) 「ハデスの門もそれには打ち勝てません」

①ピリポ・カイザリヤの村々は、異教世界では「地獄の門」として知られていた。

②イエスは、自らの死も、使徒たちの死も、教会の存続を止めることはないと教えた。

*イエスは、自らの死を予感しておられた。

III. 使徒としての特権の付与(19~20節)

1. 19節 a

「わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます」

(1) 鍵は権威の象徴である。

- ① 鍵は、天の御国の扉を開くためのものである。
- ② ここでは、「天の御国」とは、直前に語られた教会のことである。

(2) ペテロは、使徒行伝の中で特別な役割を演じた。

- ① 人類は、ユダヤ人と異邦人に分類されてきた。
- ② エズラ記になると、ユダヤ人、サマリヤ人、異邦人の3区分が登場する。
- ③ ペテロは、その3区分の人たちのために天の御国の扉を開いた。

*ユダヤ人 使2章

*サマリヤ人 使8章

*異邦人 使10章

2. 19節 b

「何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています」

(1) 「つなぐ」と「解く」は、ペアになっている語である。

- ① 司法上の意味では、有罪と無罪を意味する。
- ② 立法上の意味では、禁止と許可を意味する。

(2) ペテロが自由気ままに裁定を下すという意味ではない。

- ① 父なる神の御心を理解し、その実践者となるという意味である。

3. 20節

「そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた」

(1) この段階でのイエスのポリシー通りである。

結論：3つの誤解

1. 人間の役割の誤解

- (1) カトリック教会の教理的間違い
 - ①ペテロの高揚
 - ②マリアの高揚(例話) 真理を理解する意欲を失った形式宗教

- (2) プロテスタントも同じ間違いを犯している場合がある。
 - ①宗教改革者や、教派教団の創始者の高揚

2. ラビ用語の誤解

- (1) 「つなぐ」と「解く」が、文脈から外れて、霊の戦いの用語として用いられる。
 - ①「つなぐ」は「縛る (bind)」である。
 - ②しかし、これらの言葉は、ラビ用語である。
 - ③パリサイ人たちは、この権威を自らのものとして行使した。
 - ④時にはモーセの律法が許可していることを禁止し、時にはモーセの律法が禁止していることを許可した。
 - ⑤神は、パリサイ人たちにそのような権威を与えたことはない。
 - ⑥ペテロはこの権威をここで受け、他の使徒たちは後に受けた。

- (2) 今の教会に与えられている権威
 - ①立法上の権威は与えられていない。
 - ②罪を犯した信者に対して懲戒処分を行うという意味では、部分的に司法上の権威を有する。
- (3) 「縛る」という言葉は、サタンや悪霊を縛ることとは無関係である。
 - ①サタンは、メシアの再臨の時に縛られる (黙 20 : 2)。
 - ②私たちは、サタンに立ち向かうように命じられている (ヤコ 4 : 7)。

3. 教会の本質の誤解

- (1) ユダヤ人を対象に書かれたマタイの福音書が、教会の誕生を預言している。
 - ①ユダヤ人がイエスのメシア性を拒否した結果、奥義としての王国の時代になる。
 - ②奥義としての王国の時代は、教会時代とほぼ同義である。
 - ③教会のプログラムは挿入句のように入って来たもので、それ自体がゴールではない。
 - ④マタイの福音書は、神のユダヤ人に対する計画が再び動き始めることを前提に、教会の誕生について言及している。

(2) ペテロの信仰告白がイエスの公生涯の分水嶺となった。

①第一次世界大戦(1914年)

②1948年のイスラエル建国は、救済史の新しい分水嶺となった。

③広い視野から、日本でのクリスチャン生活を考える。

「メシア受難の予告」

§ 083 マコ 8 : 31~37、マタ 16 : 21~26、ルカ 9 : 22~25

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① 徐々に目が開かれというのは、§ 81 のテーマである。

② § 82 では、弟子たちの目が部分的に開かれた。

* イエスが民衆から歓迎される時期は終わった。

* イエスは弟子たちの信仰を確認する。

* ペテロの信仰告白は、福音書の中の分岐点、分水嶺である。

* その上で、イエスは十字架に顔を向ける。

③ § 83 では、弟子たちの目が部分的に盲目であることが明らかになる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「イエスは明確に、メシアの受難と復活を予告する」 (§ 83)

マコ 8 : 31~37、マタ 16 : 21~26、ルカ 9 : 22~25

2. アウトライン

(1) 受難の予告 (21 節)

(2) ペテロの反応 (22 節)

(3) イエスの叱責 (23 節)

(4) 弟子としての道 (24~26 節)

3. 結論 :

(1) 救われる方法

(2) 弟子となる方法

弟子としての道について学ぶ。

I. 受難の予告 (21 節)

「その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた」

1. タイミングは、「その時から」である。

(1) ペテロは、イエスが「メシアであり、生ける神の御子」であることを告白した。

①天の父の啓明による。

(2) イエスの教えが次の段階に進む時が来た。

①受難と復活の預言を語り始める。

②同様の預言が4回語られるが、この箇所がその最初のものである。

③時期的には、十字架の死のおよそ半年前のことである。

2. 予告の内容

(1) 4つのポイントがある。

①自分は、エルサレムに行かねばならない。

②長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けなければならない。

*彼らは、ガリラヤでイエスに付きまとっていた。

*エルサレムでは、さらに妨害が激しくなる。

③殺されなければならない。

④そして三日目によみがえらなければならない。

(2) 訳語の比較

「このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた」(新共同訳)

「この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた」(口語訳)

①新改訳の訳文が最もすぐれている。

②イエスの決意がよく表現されている。

③ギリシア語の「dei」、英語の「must」である。

3. 旧約の預言者たちとの比較

(1) 預言者としての召命と殉教の死とは密接に関係している。

①しかし、預言者たちはできる限り殉教の死を避けようとした。

②苦難に会った時には、神に不満を述べたりしている。

(2) イエスは、殉教の死を避けようとはしていない。

①むしろ、死ぬことがゴールであるかのような話し方をしている。

②事実イエスは、死ぬために生まれたお方である。

II. ペテロの反応 (22 節)

「するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。『主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません』」

1. ペテロの心理状態を示す2つの動詞

(1) 「引き寄せて」(プロスランバナウ)

「イエスをわきへお連れして」(新共同訳)

「イエスをわきへ引き寄せて」(口語訳)

①新改訳の訳がよい。

②「手を取って引き寄せる」という意味である。

(2) 「いさめ始めた」(エピティマオウ)

①悪いことをしたという認識のない相手に対してでも、この動詞を使う。

②いさめた結果が有効かどうかは、問題にされない。

*イエスの両側で十字架に付けられた人

③非常に強い動詞で、肉体的強制力を使ってでも阻止するというニュアンスあり。

2. 2重人格者のようなペテロ

(1) イエスからほめ言葉を受けた結果、彼自身が変わってしまった。

①イエスとの関係が親密になり過ぎた。

②傲慢が忍び込んできた。

(2) ビフォア・アフター

①天の父の啓明によって、正しい信仰告白に導かれた (§82)。

②サタンの影響によって、自己判断をするようになった (§83)。

「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません」

*強意の否定形である。

*まるでペテロがそれを阻止してみせるというような意気込みが感じられる。

*しかしペテロは、イエスのことばとは矛盾したことを語っている。

(3) ペテロの越権行為

①十字架なしに、神の国が到来すると考えている。

*当時のユダヤ人たちのメシア像と合致する。

- ②ユダヤ人の弟子たちは、自分のラビを決して批判しなかった。
- ③特に、公の場での批判はしなかった。
- ④ペテロは、当時のユダヤ人の習慣に反したことをしている。

Ⅲ. イエスの叱責 (23 節)

「しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。『下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている』」

1. 「下がれ。サタン」

(1) ペテロはサタンの影響を受け、サタンの考えを語っている。

①善意で助言する家族や親友は、サタンの最大の道具となりうる。

(2) 荒野の誘惑において、サタンはイエスを十字架から遠ざけようとした。

「イエスは言われた。『引き下がれ、サタン。「あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ」と書いてある』」(マタ4:10)

①イエスは、ペテロの背後にいるサタンに対して、同じ命令を語っている。

2. 「あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」

(1) 「汝(なんぢ)はわが躓物(つまづき)なり」(文語訳)

①信仰告白をしたペテロは、岩であった。

②彼は、教会の土台となる「建材」であった。

③その彼が、自らの使命から離れると、つまづきの岩(stumbling block)となる。

④その岩が、イエスが進もうとしている道をふさいでいる。

*ラビが弟子の名前で言葉遊びをすることがよくあった。

(2) イエスは神の計画のことを思っている。

①イエスの中に、メシアとしての自意識はいつ生まれたのか。

*分からないが、12歳の時には、「父の家」について語っている。

②イエスの中に、十字架の死という認識はいつ生まれたのか。

*分からないが、公生涯に立つ時点では認識があった。

(3) ペテロは、人間の視点からしか見ていない。

- ①イエスがそのような扱いを受けることに耐えられない。

IV. 弟子としての道 (24～26 節)

1. 24～25 節

「それから、イエスは弟子たちに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思ふ者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです』」

(1) 第1の誘惑は、自分を救いたいという本能的な欲求である。

- ①不快なこと、困難なこと、痛み、孤独などから逃れたいと思うのは、自然なことである。
- ②しかし、利己的な動機で生きる人は人生の喜びを体験することができない。
- ③イエスのために生きる人は、人生の意味を発見するようになる。

2. 26 節

「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう」

(1) 第2の誘惑は、金持ちになりたいという欲求である。

- ①これは、理屈に合わない欲求である。
- ②ビジネスに没頭し、大成功を収めるが、そのために時間とエネルギーを使い果たしてしまう。
- ③そして、本当に価値あるものを失ってしまう。
- ④いのちを失うなら、富を使うことができないので、富にはなんの価値もない。
- ⑤「いのちを買い戻す」とは、「いのちの代価」のことである。
 - * 「いのちの代価として、何を差し出せばよいか」の意味。
 - * 「代価」は「アンタラグマ」である。
 - * イエスの命の犠牲が暗示されている。

結論：救いを受けることと、弟子として成長することとは、その本質が異なる。

1. 救われる方法

- (1) 人は、恵みにより、信仰によって救われる。
- (2) 信仰の内容は、福音である。
- (3) **1 コリ 15 : 3～4**

「私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、」

2. 弟子となる方法

- (1) 救いの場合よりも多くの要求がある。
- (2) 「自分の十字架を負う」とは、イエスが味わった人々から拒否されるという体験を、自分のものとする事である。
- (3) イエスをメシアと告白するとは、人々から拒否されることを受け入れるということである。
- (4) 自分を救おうとしてそれを避けるなら、その人は自分のいのちを失うことになる。
- (5) キリストに従う道を歩むなら、霊的安全と霊的豊かさを経験するようになる。
- (6) キリスト教は、本質的に人気を博す宗教ではない。
 - ①自己否定の道である。
 - ②しかし、自己否定のための自己否定ではない。
 - ③愛のゆえの自己否定である。
- (7) キリストを知らなかった時は、この世の生活がすべてだと思って生きていた。
 - ①しかし、この世の生活は永遠の世界に入るための準備に過ぎない。
 - ②今をどう生きるかで、死後の生活が決まってくる。
- (例話) 弟子たちは、どう生きたのか。
 - ①自発的
 - ②罪と自己中心に満ちた旧い生活の放棄
 - ③すべてにおいてキリストに従順
 - ④忍耐
- (8) パウロの証言

「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか」(ガラ5:24)

「イエスの変貌」

§ 084 マコ 8 : 38~9 : 1、マタ 16 : 27~28、ルカ 9 : 26~27

§ 085 マコ 9 : 2~8、マタ 17 : 1~8、ルカ 9 : 28~36

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①弟子たちの霊の目が徐々に目が開かれていく。
- ②ペテロの信仰告白
- ③イエスによる十字架と復活の預言
- ④イエスの変貌

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「この時代に起こる人の子の来臨」 (§ 84)

マコ 8 : 38~9 : 1、マタ 16 : 27~28、ルカ 9 : 26~27

「山頂でのイエスの変貌」 (§ 85)

マコ 9 : 2~8、マタ 17 : 1~8、ルカ 9 : 28~36

(3) イントロダクション

「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしています。その時には、おのおのその行いに応じて報いをします。まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々があります」 (マタ 16 : 27~28)

- ①受難と復活の予告の箇所のみとなっている。
- ②と同時に、イエスの変貌の序言ともなっている。
- ③「人の子が御国とともに来る」とは、どういう意味か。
 - *イエスの復活
 - *ペンテコステ
 - *イエスの再臨
 - *正解は、イエスの変貌である。
- ④マタイの福音書の16章と17章の区切りは、残念なものである。
- ⑤マタ 16 : 28 のことばは、マタ 17 : 1~8 で成就している。

2. アウトライン

- (1) 舞台設定 (1 節)
- (2) 起こったこと (2~3 節)

- (3) ペテロの応答 (4 節)
- (4) 天からの声 (5～8 節)

3. 結論：神学的意味

- (1) メシア的王国の予表
- (2) 死後の世界の保証
- (3) イエスの愛の証明

変貌の意味について学ぶ。

I. 舞台設定 (1 節)

1. 1 節

「それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた」(1 節)

- (1) 出 24 : 15～18 との対比

「モーセが山に登ると、雲が山をおおった。【主】の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた」(出 24 : 15～16)

- ①山の上での出来事である。

- *シナイ山とヘルモン山
- *タボル山ではない。「高い山」とある。
- *ヘルモン山はイスラエルで最も高い山である。
- *ピリポ・カイザリヤはヘルモン山の麓にある。

- ②【主】の栄光が現れた。

- *シナイ山をおおった雲は、【主】の栄光である。
- *これをシャカイナグローリーという。
- *イエスの変貌は、シャカイナグローリーの表れである。

- ③6 日間

- *モーセは6日間待ち、7日目に神の声を聞いた。
- *「それから六日たって」、弟子たちはイエスの変貌を目撃した。
- *「これらの教えがあつてから八日ほどして、」(ルカ 9 : 28)
 - ・概数。前後の日を加算しているのであろう。
 - ・8は復活の数字、始まりの数字である。

(2) 3人が特権に与る。

①出24:9~11では、アロン、ナダブ、アビフの3名と、70人の長老たち。

*ナダブとアビフはアロンの息子たち

②マタ17章では、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネ。

*彼らは、イエスに最も近い弟子たちであった。

*弟子訓練の際には、与える情報量は受け手の能力によって異なってもよい。

2. ルカ9:32

「ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきり目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た」

(1) 変貌の最初の段階では、彼らは寝ていた。

①ゲツセマネの園でも、彼らは寝ていた。

②今の人間性が変わらなければ、天国に入ることはできない。

II. 起こったこと (2~3節)

1. 2節

「そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった」(2節)

「その御衣は、非常に白く光り、世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった」(マコ9:3)

「祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた」(ルカ9:29)

(1) 何が起こったか。

①イエスの御顔の様子が変わった。

*別のもの(ヘテロス)になった。

②御姿が変わった。

*メタモオフォオウという動詞

*毛虫が蝶に変化する際の動詞

*変貌山という言葉は、この動詞から来ている。

③衣は白く光り輝いた。

(2) その意味は何か。

①イエスの内にあったシャカイナグローリーが啓示された。

②肉体というベールを通過して、シャカイナグローリーが現れた。

- ③モーセの顔は輝いた。月が太陽の光を反射するように。
- ④イエスの顔も輝いた。イエスは太陽そのものである。
- ⑤イエスが、マタ16:28で約束したことが成就した。

2. 3節

「しかも、モーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているではないか」(3節)

(1) モーセとエリヤは、旧約聖書の代表的人物である。

- ①モーセは律法を象徴する。
- ②エリヤは預言者(預言書)を象徴する。
- ③律法と預言書は、メシアの受難と復活を指し示している。

(2) 話の内容を記しているのは、ルカだけである。

「栄光のうちに現れて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである」(ルカ9:31)

- ①「ご最期」は、「エクソドス」である。
- ②出て行くこと、出発。地上から出て行くという意味で、「死」である。
- ③しかし、死を意味する通常の言葉とは異なる(サナトス)。
- ④七十人訳聖書は、出エジプト記に「エクソドス」というタイトルを付けた。
- ⑤「ご最期」とは、「出発」であり、「旅立ち」である。
- ⑥弟子たちは、イエスがエルサレムで遂げようとしておられることを理解していなかった。

(3) イエスの「旅立ち」は、2つの結果をもたらす。

- ①人間性の制限からの解放。イエスは肉体を脱ぎ、栄光の体を着るようになる。
- ②イエスを信じる者は、罪、この世、悪魔の奴隷状態から解放される。

III. ペテロの応答(4節)

1. 4節

「すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。『先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ』」(4節)。

(1) 訳文の比較

「これを見て、ペテロは思わず口走りました」(リビングバイブル)

「Peter exclaimed,」(NLT)

(2) ペテロは3つの幕屋を造ることを提案した。

①幕屋ではなく、「仮小屋」(新共同訳)、「小屋」(口語訳)とすべきである。

(3) ペテロはイエスがメシアであることと、メシア的王国の栄光を見ていることを理解した。

①いまだに、初臨と再臨の区別はついていない。

②それゆえ、メシアの受難と復活は理解していない。

③しかし、メシア的王国と仮庵の祭りの関係は理解している。

④ゼカ14:16~19にメシア的王国における仮庵の祭りの預言がある。

⑤ペテロの提案はよいものであるが、タイミングが間違っていた。

*約2000年のずれがある。

⑥仮庵の祭りの前に、過越の祭りが来る。

*メシアの死のことである。

IV. 天からの声(5~8節)

1. 5~6節

「彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、『これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい』という声がした。弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった」(5~6節)

(1) 光り輝く雲は、シャカイナグローリーである。

(2) 天からの声は、バットコルである。

①イエスの洗礼の時に、同じ内容の言葉が下った。

②ここでは、「彼の言うことを聞きなさい」が新しく加わった。

③「これに聞け」(新共同訳)(口語訳)

④「Listen to Him!」(NASB)

(3) モーセ(律法)でもエリヤ(預言書)でもなく、イエスに聞け。

①イエスだけが、メシア的王国を地上にもたらすことができるから。

2. 7~8節

「すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、『起きなさい。こわがることはない』と言われた。それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけ

であった」(7~8節)

- (1) 地にひれ伏すのは、ユダヤ人としては自然の反応である。
 - ①イエスは、弟子たちの恐れを取り除かれた。
- (2) ただイエスだけが残された。
 - ①「これに聞け」の再確認になっている。
 - ②イエスだけが、私たちを救い、地上にメシア的王国をもたらすことができる。

結論：神学的意味

1. メシア的王国の予表

- (1) ペテロの理解はさらに深まった。

「私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。『これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。』私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです」(2ペテ1:16~18)

 - (2) 「来臨」とは、キリストの再臨のことである。

2. 死後の世界の保証

- (1) モーセは、死んで復活する聖徒の代表である。
- (2) エリヤは、携挙に与る聖徒の代表である。
- (3) メシア的王国(千年王国)においては、3種類の人たちが住んでいる。
 - ①復活した聖徒たち
 - ②挙げられた聖徒たち
 - ③地上の肉体をもって生きている人たち(大患難時代を生き延びた聖徒たち)
- (4) モーセ、エリヤ、3人の弟子は、御国における3種類の人たちを象徴している。

3. イエスの愛の証明

- (1) 誕生の際に、シャカイナグローリーを隠した。
- (2) 今再び、シャカイナグローリーを隠して山を下る。
- (3) 昇天後は、永遠にシャカイナグローリーが隠されることはない。

「山頂から麓へ」

§086 マコ9:9~13、マタ17:9~13、ルカ9:36

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ペテロの信仰告白
- ②イエスによる十字架と復活の預言
- ③イエスの変貌

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「復活とエリヤについて当惑する弟子たち」 (§86)

マコ9:9~13、マタ17:9~13、ルカ9:36

(3) 山頂と麓の対比

- ①理想と現実のギャップ
- ②将来と現在のギャップ

2. アウトライン

- (1) イエスの命令：沈黙
- (2) 弟子たちの質問：終末論の混乱
- (3) イエスの回答：エリヤとは誰かの解説

3. 結論：

- (1) バプテスマのヨハネに関する復習
- (2) 終末論の整理
- (3) 山頂から麓へ

イエスと弟子たちの会話を通して、終末論を整理する。

I. イエスの命令：沈黙

1. 9節

「さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた」

- (1) 弟子たちは、いまだにメシアの使命と計画を理解していない。

- ①ペテロは、信仰告白をしたが、イエスの受難を否定した。
 - ②彼は、エルサレムに上らないで、この山で仮庵の祭りを祝うことを提案した。
 - *恐らく、時期的には秋の祭りである仮庵の祭りが近づいていたのであろう。
 - *イエスが十字架にかかる約半年前である。
- (2) イエスは、弟子たちに沈黙するように命じた。
- ①変貌の出来事を今言い広めると、政治的メシア像を宣伝することになる。
 - ②沈黙の期間は、「人の子が死人の中からよみがえるときまで」である。
 - ③つまり、変貌の出来事の意味やメシア的王国の希望は、復活という事実を通してしか理解されないものなのである。

II. 弟子たちの質問：終末論の混乱

1. 10節

「そこで彼らは、そのおことばを心に堅く留め、死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った」

- (1) 「そのおことばを心に堅く留め」
 - ①これまで心に残らなかった復活というテーマの重要性が、分かり始めた。
 - ②受難と復活に関することばが、初めて心に届いた。

- (2) 彼らは、「死人の中からよみがえる」ということばの意味について論じ合った。
 - ①彼らは、死後の復活を信じていた。
 - ②しかし、メシアであるイエスは死ぬはずがない。
 - ③イエスは、死者を甦らせてきた。
 - ④イエスの変貌の姿を、今見たばかりではないか。

- (3) 彼らは、明らかに混乱している。
 - ①これは、終末論に関する混乱である。
 - ②そこで、エリヤに関する質問が始まる。

2. 11節

「彼らはイエスに尋ねて言った。『律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか』」

- (1) 彼らは、3つの理由で、世の終わりが近いという認識を持った。
 - ①山頂で、エリヤが現れた。

- ②イエスのメシア性は、シャカイナグローリーとバットコルにより証明された。
- ③イエスは死後の復活の話をされた。

(2) 彼らは、終末とエリヤの関係について質問した。

「律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか」

①マラ4:5~6

「見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ」

- ②もしエリヤが先駆者として来るなら、いつ来るのか。
- ③エリヤが先駆者として奉仕するなら、メシアは死ななくてもよいのではないか。

III. イエスの回答：エリヤとは誰かの解説

1. 12節

「イエスは言われた。『エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか』」

(1) イエスは、先ずエリヤが来て、すべてを立て直すということを認めた。

- ①「Elijah is coming ...」
- ②これは、将来のことである。

(2) だからと言って、メシアの受難の必要性がなくなるわけではない。

①メシアの受難は、明確に預言されている。

*「書いてある」

*「It is written」で、聖書に書かれているということ。

②詩22篇、イザ53章など参照。

(3) エリヤが先駆者として到来するということと、メシアの受難とは、どのようにして調和させられるのか。

2. 13節

「しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです」

(1) イエスは、エリヤはすでに来たと言われた。

- ①「しかし」は、ギリシア語の「アッラ」で強意。
- ②イエスは、バプテスマのヨハネのことを言っている。
- ③「そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです」
- ④エリヤは、アハブとイゼベルによって苦しめられた。
- ⑤バプテスマのヨハネは、ヘロデ・アンティパスとヘロデヤによって殺された。

(2) マラ 3 : 1

『見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている』と万軍の【主】は仰せられる」

- ①メシアの先駆者に関する預言は、2つある。
 - *マラ 3 : 1 は、無名の先駆者に関する預言。
 - *マラ 4 : 5~6 は、エリヤに関する預言。
- ②先駆者が2人備えられているのは、メシアの初臨と再臨があるからである。
- ③バプテスマのヨハネは、エリヤの霊と力で奉仕した。

結論

1. バプテスマのヨハネに関する復習

(1) 天使ガブリエルが語ったザカリヤへの預言

「彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです」(ルカ 1 : 17)

- ①バプテスマのヨハネのは、エリヤの霊と力で先駆者としての奉仕を展開する。

(2) ヨハネ自身は、自分がエリヤだとは思っていなかった。

「また、彼らは聞いた。『では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。』彼は言った。『そうではありません。』『あなたはあの預言者ですか。』彼は答えた。『違います』(ヨハ 1 : 21)

(3) しかしイエスは、ヨハネ自身が気づいていなかったことを示された。

「バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。ヨハネに至るまで、すべての預言者たちと律法とが預言をしたのです。あなたがたが進んで受け入れるなら、実はこ

の人こそ、きたるべきエリヤなのです」(マタ 11:12~14)

- ①もしユダヤ人たちがメシア的王国の提案を受け入れていたなら、バプテスマのヨハネはエリヤの役割を果たしたことになる。
- ②しかし彼らはそれを拒否したので、メシア的王国の成就是先延ばしになった。

2. 終末論の整理

- (1) バプテスマのヨハネがメシアの先駆者として奉仕した。
 - ①マラ 3:1の成就
 - ②しかし、エリヤが苦しめられたのと同じように、ヨハネも苦しめられた。
 - ③最後は、ヘロデ・アンティパスとヘロデヤによって殺された。

- (2) イエスは、神の小羊として現れ、メシアとして奉仕した。
 - ①もしユダヤ人たちがイエスを受け入れていたなら、メシア的王国は成就していた。
 - ②しかし、彼らはイエスを拒否した。
 - ③イエスは、十字架にかかり、復活された。
 - ④そして、教会時代が始まった。

- (3) 終わりの時に、預言者エリヤが先駆者として奉仕をする。
 - ①エリヤの奉仕は有効で、人々は霊的覚醒を経験するようになる。

- (4) その時イエスは、栄光の王として再臨し、地上にメシア的王国を樹立する。

3. 山頂から麓へ

- (1) 山頂にいては、麓の苦しみを思う。
 - (2) 麓にいては、山頂の祝福を思う。
- (例話) 被災地に残された犬

「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。【主】を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである」(イザ 11:6)

「麓にて」

§ 087 マコ 9 : 14~29、マタ 17 : 14~20、ルカ 9 : 37~43

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ペテロの信仰告白
- ②イエスによる十字架と復活の預言
- ③イエスの変貌
- ④山頂から下る途中で、終末論の教えがあった。
- ⑤麓の現実と直面する。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「弟子たちが癒せなかった悪霊につかれた少年」 (§ 87)

マコ 9 : 14~29、マタ 17 : 14~20、ルカ 9 : 37~43

(3) 山頂と麓の対比

- ①理想と現実のギャップ
- ②将来と現在のギャップ

2. アウトライン

- (1) 現実の問題
- (2) 父親との対話
- (3) 悪霊の追い出し
- (4) 弟子たちの質問

3. 結論 :

- (1) 父親の信仰
- (2) 死んだようになった子ども
- (3) 弟子たちの無力

麓での問題に対処する方法について学ぶ。

I. 現実の問題

1. 14~16 節

「さて、彼らが、弟子たちのところに帰って来て、見ると、その回りに大ぜいの人の群れがおり、また、律法学者たちが弟子たちと論じ合っていた。そしてすぐ、群衆はみな、イエスを見ると驚き、走り寄って来て、あいさつをした。イエスは彼らに、『あなたがたは弟子たちと何を議論しているのですか』と聞かれた」

(1) 麓には9人の弟子たちが残されていた。

①イエスがいない間、彼らはイエスの代理人(使徒)として奉仕をする。

②ところが、彼らは具体的問題に対処できないで、大騒ぎになっていた。

③律法学者たちが、弟子たちと論じ合っていた。

*論争のテーマは書かれていない。

④野次馬が取り巻いていた。

(2) イエスが麓に立たれた。

①群衆は、イエスを見るなりすぐに走り寄って来た。

*律法学者よりも、イエスをひいきしていた。

②群衆が驚いた理由

*イエスの顔に輝きが残されていたからか。

*予期せぬ出現、タイムリーな出現だったからか。

(3) イエスは、群衆に質問された。

①私の弟子たちと、何を議論しているのか。

II. 父親との対話

1. 17~18節

「すると群衆のひとりが、イエスに答えて言った。『先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、先生のところに連れて来ました。その霊が息子にとりつくると、所かまわず彼を押し倒します。そして彼はあわを吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます。それでお弟子たちに、霊を追い出すよう願ったのですが、できませんでした』」

(1) 回答は、群衆のひとりから返ってきた。

①彼には、口をきけなくする霊につかれた息子がいた。

②その息子をイエスのもとに連れて来た。

③霊は、息子を非常に苦しめていた。

*この状態は、メシア的奇跡のひとつである。

④弟子たちに助けを求めたが、弟子たちにはそれができなかった。

*イエスの弟子という名に傷が付く状態である。

*その結果、律法学者による追及が始まった。

2. 19 節

「イエスは答えて言われた。『ああ、不信仰な世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい』」

(1) イエスの嘆き

- ①群衆と弟子たちに向けられたもの
- ②特に、弟子たちの霊的鈍感さを嘆かれた。

(2) 訳語の比較

「ああ、不信仰な世だ」(新改訳)

「なんと信仰のない時代なのか」(新共同訳)

「ああ、なんとという不信仰な時代であろう」(口語訳)

- *「不信仰な世代」という意味
- *不信仰こそが、霊的失敗の原因である。

(3) 「その子をわたしのところに連れて来なさい」

- ①この時点で、イエスは群衆からは離れている。
- ②イエスは、弟子たちの失敗を修復しようとしている。

3. 20～22 節

「そこで、人々はイエスのところにその子を連れて来た。その子がイエスを見ると、霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。イエスはその子の父親に尋ねられた。『この子がこんなになってから、どのくらいになりますか。』父親は言った。『幼い時からです。この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください』」

(1) その子の状態

- ①イエスを見ると、中にいる霊が激しく暴れた。
 - *悪霊は、自分の終わりの時が近いことを認識した。
 - *てんかんのようであるが、これは病気ではない。
- ②その状態は、幼い時から続いている。
- ③この霊は、この子を滅ぼそうとしている。
 - *悪霊の目的は、私たちを滅ぼすことにある。

(2) 父の嘆き

「ただ、もし、おできになるものなら、私たちがあわれんで、お助けください」

- ①弟子たちの無力を目撃したので、イエスに対する信仰がなくなっている。
- ②半分は疑い、半分は絶望している。

3. 23～24 節

「するとイエスは言われた。『できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。』するとすぐに、その子の父は叫んで言った。『信じます。不信仰な私をお助けください』」

(1) イエスは、その父親の不信仰を指摘された。

「できるものなら、と言うのか」

- ①イエスにそのような力があるかどうかは、問題ではない。
- ②父親に信仰があるかどうか問題である。
- ③イエスは、できる限り個人的状況の中で癒しを行おうとしている。
- ④受け手に信仰があることが、条件である。

(2) イエスは、信仰の力を指摘された。

「信じる者には、どんなことでもできるのです」

- ①信仰は、神の力に制限を設けない。
- ②信仰は、結果を神に委ねる。

(3) 父親はすぐに信仰を告白した。

「信じます。不信仰な私をお助けください」

- ①信じるためには、神の助けが必要である。

III. 悪霊の追い出し

1. 25 節

「イエスは、群衆が駆けつけるのをご覧になると、汚れた霊をしかって言われた。『口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな』」

(1) イエスは、群衆から離れたところにおられた。

- ①群衆が駆けつけてきた。

(2) 悪霊の追い出し

①「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊」という呼びかけ。

②2つの命令

*「この子から出て行け」

*「二度とこの子に入るな」

2. 26～27 節

「するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。するとその子が死人のようになったので、多くの人々は、『この子は死んでしまった』と言った。しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった」

(1) 悪霊が出て行くと、その子は死人のようになった。

①多くの人々は、そう考えた。

(2) しかしイエスは、その子を起こされた。

IV. 弟子たちの質問

1. 28 節

「イエスが家に入られると、弟子たちがそっとイエスに尋ねた。『どうしてでしょう。私たちに追いつけなかったのですが』」

(1) 私的空間に入ると、弟子たちは個人的に質問をした。

①自分たちに悪霊の追い出しができなかった理由は、何か。

2. 29 節

「すると、イエスは言われた。『この種のもの、祈りによらなければ、何によっても追いつけるものではありません』」

(1) 「この種のもの」とは、一般的な悪霊の追い出しのことであろう。

①祈りの欠如が問題である。

②つまり、父なる神への信頼が不足しているのである。

3. マタ 17 : 19～20

「そのとき、弟子たちはそっとイエスのもとに来て、言った。『なぜ、私たちに悪霊を追いつけなかったのですか。』イエスは言われた。『あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、「ここからあそこに移れ」と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはあ

りません』

- (1) 必要とされる信仰のサイズは、からし種のサイズでよい。
 - ①それがあれば、イエスの代理人である弟子たちには、できたはずである。
 - ②父なる神への祈りが必要である。

- (2) 「この山」
 - ①山とは、王国を象徴する言葉である。
 - ②ここでは、「この山」とはサタンの王国である。

結論：

1. 父親の信仰告白

「するとイエスは言われた。『できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。』するとすぐに、その子の父は叫んで言った。『信じます。不信仰な私をお助けください』(マコ9:23~24)

- (1) キリスト教信仰の本質が表現されている。
 - ①信じようとする意欲がなければ、救われない。
 - ②神の助けがなければ、信じることはできない。
 - ③ペテロの信仰告白
「するとイエスは、彼に答えて言われた。『バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です』(マタ16:17)
 - ④これは、クリスチャンが抱く、体験に基づく実感でもある。

- (2) 神の予定と人間の自由意志を調和させる方法である。
 - ①両方とも受け入れる必要がある。

2. 死んだようになった子ども

「するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。するとその子が死人のようになったので、多くの人々は、『この子は死んでしまった』と言った。しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった」(マコ9:26~27)

- (1) マコ5:39~42にあるヤイロの娘の癒しの箇所という言葉使いとよく似ている。
 - ①ヤイロの娘は、死から命に移った。
 - ②その子は、サタンの束縛から解放された。

③それは、いわば死から命に移る体験であった。

(2) 死から命への移行を完成させるためには、メシアの死と復活が必要とされる。

①もはや逆戻りはない。

②死から命への移行が決定的となった。

3. 弟子たちの無力

「イエスが家に入られると、弟子たちがそっとイエスに尋ねた。『どうしてでしょう。私たちに追いつけなかったのですが。』すると、イエスは言われた。『この種のもの、祈りによらなければ、何によっても追いつけるものではありません』(マコ9:28~29)

(1) 自分に与えられた力を、固定的資質として理解していた。

「また、十二弟子を呼び、ふたりずつ遣わし始め、彼らに汚れた霊を追いつく権威をお与えになった」(マコ6:7)

(2) 過去の経験を頼りとしていた。

「こうして十二人が出て行き、悔い改めを説き広め、悪霊を多く追いつく、大ぜいの病人に油を塗っていやした」(マコ6:12~13)

(3) 祈りによって、父なる神に信頼することをしなかった。

(4) 麓にある問題に取り組む力はどこから生まれて来るのか。

①山頂の祝福を思い出し、大いなる希望を抱く。

②固定化した信仰ではなく、「汝と我」という関係の中にある信仰を保持する。

「2度目の受難予告」

§ 088 マコ9:30~32、マタ17:22~23、ルカ9:43~45

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①山頂体験と麓の体験
- ②ものを言えなくする悪霊の追い出し
- ③人々の驚き
- ④そのタイミングで、イエスは弟子たちに2度目の受難予告をされる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「2度目の受難の予告」 (§ 88)

マコ9:30~32、マタ17:22~23、ルカ9:43~45

2. アウトライン

- (1) 問題の発生
- (2) イエスのことば
- (3) その結果

3. 結論：パラドックスに関する考察（自己矛盾を起こす命題）

- (1) 第1のパラドックス
- (2) 第2のパラドックス
- (3) すべてが知らされていないことの祝福

2つのパラドックスについて考えてみる。

I. 問題の発生（ルカ9:43）

「人々はみな、神のご威光に驚嘆した。イエスのなさったすべてのことに、人々がみな驚いていると、イエスは弟子たちにこう言われた」（43節）

1. イエスは悪霊の追い出しを行った。
 - ①それを見た人々は、神の威光が示されたと解釈した。
 - ②人々はみな、イエスの力に驚いた。
2. 人々が、イエスを政治的メシアとして祭り上げる危険性があった。

- ①弟子たちも、一般民衆の熱狂に巻き込まれている。
- ②しかしイエスは、十字架に向かって歩み始めている。

3. ルカは、人々の熱狂と、受難の予告を、並べている。

II. イエスのことば (44 節)

「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に渡されま
す」 (44 節)

1. 弟子たちの頭を冷やす必要があった。

「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい」

(1) 日本語には、「あなたがた (ヒューメイス)」という言葉が訳出されていない。

- ①原文では、「あなたがた」が強調されている (置かれた位置で分かる)。
- ②他の人たちがどのような評価を下そうとも、あなたがたに関しては…。

(2) 「しっかりと耳におさめておきなさい」とは、よく記憶せよという意味である。

2. 耳におさめるべき真理とは何か。

「人の子は、いまに人々の手に渡されます」

(1) これは、2度目の受難の予告である。

- ①「人の子」とは、メシアの称号である。
- ②人の子は、いまに人々の手に渡される。
- ③「メレイ」というギリシア語が使われている。すぐに実現するという意味。

III. その結果

「しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。このみことばの意味は、わから
ないように、彼らから隠されていたのである。また彼らは、このみことばについてイエスに尋
ねるのを恐れた」 (45 節)

1. 弟子たちは、このみことばが理解できなかった。

(1) ことばが通じなかったわけではない。

- ①その後の彼らの行動を見ると、ことばは通じている。
- ②しかし、彼らにはその意味が分からなかったのである。

2. 理解できなかった理由は何か。

「このみことばの意味は、わからないように、彼らから隠されていたのである」

(1) 訳文の比較

「しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。このみことばの意味は、わからないように、彼らから隠されていたのである」(新改訳)

「弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように隠されていたのである」(新共同訳)

「しかし、彼らはなんのこともわからなかった。それが彼らに隠されていて、悟ることができなかったのである」(口語訳)

(2) 理解できなかった理由は、その意味が彼らから隠されていたからである。

①このパラドックスについては、結論で取り上げる。

3. 彼らは、質問することを恐れた。

(1) 自分たちの不安が的中することを恐れたのであろう。

①イエスの変貌を目撃した3人(ペテロ、ヤコブ、ヨハネ)は、その意味を理解し始めていたのであろう。

②他の9人の理解は、まだその段階には至っていない。

(2) この箇所でも、一部見えていて、一部見えていないというテーマが続いている。

結論

はじめに：パラドックスとは、自己矛盾を起こす命題である。

「矛と盾」を売る商人の故事(楚の国)

「I always lie.」

1. 第1のパラドックス

(1) 栄光と苦難というパラドックス

①変貌山でのペテロの経験

(2) 人気と敵対というパラドックス

①麓での弟子たち全員の経験

(3) このパラドックスは、メシアの来臨が2度あることを理解することで解ける。

①初臨のメシアは、受難のメシアである。

②再臨のメシアは、栄光のメシアである。

2. 第2のパラドックス

(1) イエスのことばと、ルカの記録

①イエスは「しっかりと耳に入れておきなさい」と命じた。

②ルカは、「このみことばの意味は、わからないように、彼らから隠されていたのである」と書いている。

(2) 誰がこの真理を弟子たちから隠したのか。

①「弟子たちの頑固な姿勢が、彼らから真理を隠した」と考えられる。

*彼らは、栄光のメシアというイメージしか持っていなかった。

*その姿勢を、最後まで変えなかった。

②「神が、彼らから真理を隠した」とも考えられる。

*この場合は、弟子たちの責任は多少軽くなる。

③恐らく両方の要因が絡まっていたのであろう。

(3) このパラドックスは、地上生涯が続く限り存在する。

3. すべてが知らされていないことの祝福

(1) 弟子たちがすべてを理解していたなら、彼らは逃げ出していたであろう。

「イエスは彼らに向かって言われた。『まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。わたしは毎日、宮であなたがたといっしょにいて、教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえなかったのです。しかし、こうなったのは聖書のことばが実現するためです。』すると、みながイエスを見捨てて、逃げてしまった。ある青年が、素はだに亜麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕らえようとした。すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかですげた」(マコ14:48~52)

(2) 後になって分かったことがある。

①イエスは、何が起こるかをすべて知っておられた。

②イエスは、自分の意志で、十字架にかかられた。

③ヨハ13:5~7

「それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまもっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。こうして、イエスはシモン・ペテロのところに来られた。ペテロはイエスに言った。『主よ。あなたが、私の足を洗ってくださる

のですか。』イエスは答えて言われた。『わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります』

*洗足は、靈的洗いを象徴している。

*洗足の靈的意味は、十字架と復活の後で分かるようになった。

(3) 私たちへの適用

①将来のことは分からないので、生きるのは楽しい。

②分からないことがあるので、私たちは謙遜にさせられる。

③詩131篇は「知的謙遜の歌」である。

「【主】よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように私の前におります。イスラエルよ。今よりとこしえまで【主】を待て」(詩131:1~3)

「神殿税を払うイエス」

§ 088 マタ 17 : 24~27

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①山頂体験と麓の体験
- ②2度目の受難予告
- ③きょうの箇所も、弟子訓練という文脈で読む必要がある。
- ④ペテロへの個人レッスンである。
- ⑤時代的、文化的背景を理解し、そこから普遍的教えを抽出する必要がある。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「メシアであるイエスが、2分の1シケルの神殿税を払う」 (§ 89)

マタ 17 : 24~27

2. アウトライン

- (1) 起：モーセの律法の規定
- (2) 承：宮の納入金を集める人たちの登場
- (3) 転：イエスの教え
- (4) 結：銀貨をくわえた魚の奇跡

3. 結論：

- (1) 神の方法と人間の責務
- (2) 信者の特権

銀貨をくわえた魚の奇跡を、私たちの生活に適用してみる。

I. 起：モーセの律法の規定

1. この記録は、マタイの福音書にのみ出てくる。

- (1) 読者はユダヤ人である。
 - ①ユダヤ人には大いに関心のある内容である。
 - ②異邦人には、興味のない話である。
 - ③モーセの律法の規定を知らないと何が起っているかを理解できない。

(2) 出 30 : 11~15

「【主】はモーセに告げて仰せられた。『あなたがイスラエル人の登録のため、人口調査をするとき、その登録にあたり、各人は自分自身の贖い金を【主】に納めなければならない。これは、彼らの登録によって、彼らにわざわいが起こらないためである。登録される者はみな、聖所のシェケルで半シェケルを払わなければならない。一シェケルは二十ゲラであって、おのおの半シェケルを【主】への奉納物とする。二十歳、またそれ以上の者で登録される者はみな、【主】にこの奉納物を納めなければならない。あなたがた自身を贖うために、【主】に奉納物を納めるとき、富んだ者も半シェケルより多く払ってはならず、貧しい者もそれより少なく払ってはならない」

- ①人口調査のたびに、半シェケルを支払う。
- ②これは、幕屋と礼拝を維持するための財源となる。
- ③彼らをわざわいから守る「贖い金」である。
- ④これが、納めるための動機となる。
- ⑤富む者も貧しい者も、等しく半シェケルを支払う。

(3) 歴史的展開

- ①バビロン捕囚からの帰還後、神殿税となる。

「私たちは、私たちの神の宮の礼拝のために、毎年シェケルの三分の一をささげるとの命令を自分たちで定めた」(ネヘ10:32)

*神殿での礼拝維持のために、毎年捧げること定めた。

*減額されて、3分の1シェケルとされた。

- ②イエスの時代になると、毎年、過越の祭りの時期に納める神殿税となった。

*額は、2分の1シェケル。

*離散の地にいるユダヤ人も、これを支払った。

*ユダヤ人の民族的連帯の表現でもあった。

*慈善によって生活している人たち、物乞いたちには、強制しなかった。

2. 律法に対するイエスの姿勢

- (1) モーセの律法は、完ぺきに守られた。

「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」(マタ5:18)

- ①モーセの律法に違反したなら、その者はメシアとは言えない。
- ②イエスが律法の要求を満たしたので、私たちは律法の責めから解放された。

- (2) しかし、口伝律法は否定された。

- ①パリサイ人との論争は、口伝律法を巡るものであった。

(3) この年、イエスは神殿税を納めていなかった。

- ①過越の祭り(春)の時期に納税する。
- ②すでに仮庵の祭り(秋)の時期になっている。
- ③約半年、納税が遅れていた。

II. 承：宮の納入金を集める人たちの登場(24節)

1. 24節

「また、彼らがカペナウムに来たとき、宮の納入金を集める人たちが、ペテロのところに来て言った。『あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか?』」

(1) 徴税役の人たちが、イエスの一行がカペナウムに戻るのを待っていた。

- ①その年、イエスとペテロは、神殿税を納入していなかった。

(2) 「あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか?」

- ①つまり、あなたがたの先生は、律法に違反するののかという意味である。
- ②もしそうなら、イエスはメシアとは言えない。

2. 25節 a

「彼は『納めます』と言って、家に入ると、」

(1) ペテロは、「はい」(ギリシア語でナイ)と言った。

- ①強意の「はい」である。「もちろん」という意味。

(2) 彼は戸惑ったことであろう。

- ①モーセの律法の規定なので、違反することは考えられない。
- ②彼自身が、なぜ支払わないのか疑問に思っていたであろう。
- ③貧しい懐具合を考えたことであろう。
- ④イエスの名誉を守るために、とりあえず「もちろん」と答えておいた。

(3) イエスに対してどう切り出したらよいか考えながら、家に入った。

- ①定冠詞がある。カペナウムの家と言えば、ペテロの家である。

III. 転：イエスの教え

1. 25節 b

「先にイエスのほうからこう言い出された。『シモン。どう思いますか。世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか』」

(1) イエスは、すべてを知っておられた。

①旧約聖書の預言者たちは、同様の知識を示している。

②1サム9:20、1列14:6、2列5:26、6:32

(2) イエスから先に質問された(ラビ的教授法)。

「シモン。どう思いますか。世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか」

①当時のローマ帝国では、王の子どもたちは納税を免除された。

*パレスチナにおいては、ローマの市民権を持つ者は、免税された。

②ユダヤ教でも、免税という概念は知られていた。

*祭司たち、神殿で仕える者たちは、それを自分に適用した。

2. 26節

「ペテロが『ほかの人たちからです』と言うと、イエスは言われた。『では、子どもたちにはその義務がないのです』」

(1) ペテロは、正しく回答した。

①王たちは、自分の子どもたち以外の者たちから税を取り立てる。

②現代の民主主義社会では、あり得ないことである。

(2) 「では、子どもたちにはその義務がないのです」

①子どもたちは、納税を免除される。

②イエスの論点

*神殿は父の家である。

*イエスは父の息子である。

*それゆえ、神殿での礼拝維持のために税を納める必要はない。

*イエスの弟子たちは御国の子どもたちであるので、免税される。

(3) マタイの福音書の読者たちは、イエスのことばをどのように受け止めたのか。

①イエスは、モーセの律法に違反しているのではない。

②イエスはユダヤ教の希望であるがゆえに、神殿税を払う必要がない。

IV. 結：銀貨をくわえた魚の奇跡

1. 27節

「しかし、彼らにつまずきを与えないために、湖に行って釣りをして、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけるとスタテル一枚が見つかるから、それを取って、わたしとあなたとの分として納めなさい」

(1) ユダヤ人の指導者たちは、イエスを糾弾する理由を捜していた。

- ①イエスは、このような些細なことで問題を起こしたくはなかった。
- ②相手の要求を呑むことにした。

(2) ペテロに、好きなことをするように命じた。

- ①ペテロは、ガリラヤ湖に釣り糸を垂れた。
- ②最初に釣れた魚の口に、銀貨が見つかる。
- ③スタテル銀貨=4 ドラクマ (4 デナリ)
- ④ひとり分の税は、2 デナリ (労働者2日分の賃金) であった。

2. 話はここで終わっているが、ペテロがイエスの命令通りにしたことは明白である。

(1) ちなみに、ペテロの魚と言われている魚は、銀貨を加えることができるほどの大きさの口を持っている。

- ①しかし、ここに出てくる魚は、ペテロの魚ではない。
- ②恐らくナマズであろう。

結論

1. 神の方法と人間の責務

(1) イエスの全知

- ①ガリラヤ湖のどの魚が銀貨を加えているかを知っていた。
- ②その魚がどこにいるかを知っていた。
- ③ペテロが最初に釣る魚がそれであることを知っていた。

(2) イエスは銀貨を直接与えないで、ペテロの働きを要求した。

- ①神は、人を用いて働かれる。
- ②ここでは、ペテロが好きなこと、得意なことを命じている。

2. 信者の特権

(1) イエスの弟子たちは、天の御国の子どもたちとしての特権を持っていた。

(2) クリスマンには、自由がある。

①ロマ8:15~16

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります」

(3) しかし、クリスマンは自由の行使を制限する。

①ガラ5:13

「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい」

②些細なことで論争する必要はない。

「誰が一番偉いかという議論」

§ 090 マコ 9 : 33~37、マタ 18 : 1~5、ルカ 9 : 46~48

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①弟子訓練が佳境に入っている。
- ②すべての信者は、義認、聖化、栄化の過程を通過する。
 - *義認は、信仰と恵みによって与えられる、瞬間的な恵みである。
 - *聖化は、時間をかけた聖霊と私たちの共同作業である。
 - *栄化は、信者の最終的な希望である。
- ③聖化は、価値観の変化と並行して進んでいく。
 - *真に価値あるものがなんであるかを理解していく。
- ④きょうの箇所は、弟子たち全員への人レッスンである。
 - *プライドの問題
 - * § 91 でも同じテーマが続く。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「12 弟子は、メシア的王国において誰が一番偉いかを議論した」 (§ 90)

マコ 9 : 33~37、マタ 18 : 1~5、ルカ 9 : 46~48

2. アウトライン

- (1) 弟子たちの関心事
- (2) イエスの質問
- (3) イエスの教え

3. 結論 :

- (1) 子どものようになる。
- (2) 子どもを受け入れる。
- (3) 人生に対する発想を転換する。

弟子たちの議論を通して、真の偉大さとは何かを考える。

I. 弟子たちの関心事

1. マタ 18 : 1

「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。『それでは、天の御国では、だれが

『一番偉いのでしょうか』

- (1) イエスは、神殿税を支払った。
 - ① イエスは、ペテロの分も支払った。
 - ② 残りの11人の分は、未払いになっている。

- (2) イエスは、3人の弟子たちを特別扱いした。
 - ① ペテロ、ヤコブ、ヨハネ
 - ② 彼らは、山頂でイエスの変貌を目撃した。

- (3) 先ず弟子たちの方からイエスに問題の解決を求めてきた。
 - ① 次にイエスが、より詳細な教えを付け加えたのであろう。

2. 33節 a

『カペナウムに着いた。イエスは、家に入った後、弟子たちに質問された』

- (1) イエスの一行は、数か月の旅行を終えて、カペナウムに戻ってきた。
 - ① 異邦人の地を巡った。
 - ② ピリポ・カイザリヤに行った。
 - ③ 「家」とは、ペテロの家である。

- (2) 弟子たちは、メシア的王国の成就が近いことを感じていた。
 - ① 変貌山での出来事
 - ② しかしイエスは、受難の予告をしておられた。

II. イエスの質問

1. 33節 b

『道で何を論じ合っていたのですか』

- (1) イエスは、弟子たちの議論の内容を知っておられた。
 - ① 「道で」とは、「道々」、「途上で」という意味である。
 - ② イエスは、受難への道を歩んでおられた。
 - ③ 弟子たちは、自己実現の道を歩んでいた。

2. 34節

『彼らは黙っていた。道々、だれが一番偉いかと論じ合っていたからである』

(1) 彼らは答えなかった。

- ① 恥ずかしかった。
- ② イエスに腹の底まで見抜かれていることに驚いた。

(2) ユダヤ人にとっては、序列は極めて重要な事項であった。

- ① 古代社会では、誕生とともに自分の社会的序列が決まる。
- ② 貧しい人たちは、資本がないので、貧しいままであった。
- ③ 経済的に成功しても、決められた序列から抜け出すのは容易ではなかった。
- ④ 多くのユダヤ人たちは、来るべき御国で序列が上がることを願っていた。
 - * 出自による序列ではない。
 - * 律法への忠実さに基づく序列である。
- ⑤ クムラン共同体では、毎年、メンバーの序列の見直しが行われた。
 - * 席順と発言の順番が、これで決まった。

(3) ルカの福音書 14 : 7~11 の例話

「招かれた人々が上座を選んでいる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。『婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、あなたやその人を招いた人が来て、「この人に席を譲ってください」とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席に着かなければならないでしょう。招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、「どうぞもつと上席にお進みください」と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すこととなります。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです』」

(例話) 日本での席順：席次

- ① 洋室での席順：入り口のドアから遠い席が上座。ドアに近いほど下座になる。
- ② 和室での席順：洋室と同じ。床の間があれば、それを背にした席が上座。
- ③ 円卓の場合：ドアから遠い席が上座。料理は上座の人から取り分ける。
- ④ タクシーの車内：運転席の後ろが上座。次がその隣。助手席は下座。

Ⅲ. イエスの教え

1. 35 節

「イエスはおすわりになり、十二弟子を呼んで、言われた。『だれでも人の先に立ちたいと

思うなら、みなとしんがりとなり、みなに仕える者となちなさい』

(1)座るのは、ラビが弟子たちを教える時の姿勢である。

①イエスは12弟子を招集した。

(2)序列に関して、新しい視点を与えた。

①神の国で最高の地位に就こうとするなら、自ら進んで仕える者となれ。

②この世で努力することや、高い地位に就くことを否定しているのではない。

③人の上に立つことが人生の目標になるなら、それは異常なことである。

④序列は、奉仕の結果として与えられるものである。

⑤この考え方を、サーバント・リーダーシップという。

2. マタ 18:2~5 (並行箇所)

「そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、言われた。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。また、だれでも、このような子どものひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです』

(1) この子どもは、おそらくペテロの子であろう。

①当時、子ども地位は非常に低かった。

②子どもに関心が向けられることは、ほとんどなかった。

③イエスは、最大の弱者である子どもに目を向けた。

(2) イエスは、子どものように謙遜になる者が、メシア的王国で一番偉い人だと言われた。

3. 36~37 節

「それから、イエスは、ひとりの子どもを連れて来て、彼らの真ん中に立たせ、腕に抱き寄せて、彼らに言われた。『だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえ

に受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです』(1)

イエスは、子どもを受け入れた。

①偉大な人は、最も評価の低い幼子たちにも仕えるのである。

(2) 三段論法

- ①イエスの名のゆえに、幼子を受け入れるなら、イエスを受け入れたことになる。
- ②イエスは、父から遣わされている。
- ③それゆえ、幼子を受け入れるなら、父なる神を受け入れたことになる。

(3) 1サム8:6~7の例

「彼らが、『私たちをさばく王を与えてください』と言ったとき、そのことばはサムエルの気に入らなかった。そこでサムエルは【主】に祈った。【主】はサムエルに仰せられた。『この民があなたに言うとおりに、民の声を聞き入れよ。それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのであるから』」

結論

1. 子どものようになる。

- (1) 子どもは、家庭における序列について心配しない。
- (2) 信者は、神の前で「幼子」の心を持つべきである。
- (3) プライドの根は、「不安感」である。
- (例話) 麓に残された弟子たちの不安。
- (例話) カルト的リーダーの問題
- (4) その解決策は、イエス・キリストを通して啓示された父なる神の愛を知ること

に

ある。

2. 子どもを受け入れる。

- (1) 最も小さき者を受け入れるということ。
- (2) その者の内に、キリストを見る。
- (例話) イスラエルで会った女性が、日本を訪問した。
- (3) 子どもへの奉仕は、2級の奉仕ではない。

3. 人生に対する発想を転換する。

- (1) 真のリーダーは、人を使うのではなく、人に仕える。
- (2) イエスは、隣人に仕え、その命を犠牲にするために来られた。
- (3) 発想の転換
 - ①為すべきことは、頼まれる前に、進んで為せ。

- ②地位や名誉のためではなく、人に仕えるために生きよ。
- (4) 永遠の世界に入る準備を、今から始めるのである。

「分派的態度を叱責するイエス」

§ 091 マコ 9 : 38~50、マタ 18 : 6~14、ルカ 9 : 49~50

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①弟子訓練が佳境に入っている。
- ②弟子たちは、誰が一番偉いかという議論を始めた。
 - *メシア的王国の成就が近い。
 - *彼らの関心事は、御国での序列であった。
- ③イエスは、サーバント・リーダーシップを教えた。
- ④きょうの箇所は、その続きである。
 - *同じく、プライドの問題が取り扱われる。
 - *より具体的には、プライドから出てくる分派意識の問題である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「ヨハネの誤った熱意が、適切なたとえ話を用いて叱責を受ける」 (§ 91)

マコ 9 : 38~50、マタ 18 : 6~14、ルカ 9 : 49~50

2. アウトライン

(1) ヨハネの報告

(2) イエスの教え

- ①兄弟を受容せよ
- ②つまずきの原因となるな
- ③つまずきの原因を取り除け
- ④生きた供え物となれ

3. 結論 :

- (1) 分派意識について
- (2) ゲヘナについて

ヨハネの報告を否定されたイエスの教えを通して、神が評価される弟子像について考える。

I. ヨハネの報告 (38 節)

「ヨハネがイエスに言った。『先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ました
が、私たちの仲間ではないので、やめさせました』」

1. 前回の箇所では、幼子を受け入れるということがテーマになった。
 - (1) メシア的王国で評価される人
 - ① 幼子のような信仰を持った人
 - ② 幼子を受け入れる人
 - (2) ヨハネはその教えを聞いて、反応している。
 - ① このような場合は、受け入れるべきではないでしょうという思いがある。
 - ② 12使徒が経験したことを、ヨハネが代表として語っている。

2. 「先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、」
 - (1) 悪霊祓いをするユダヤ人は多くいた。

「ところが、諸国を巡回しているユダヤ人の魔よけ祈祷師の中のある者たちも、ために、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をととなえ、『パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる』と言ってみた。そういうことをしたのは、ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちであった。すると悪霊が答えて、『自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ』と言った。そして悪霊につかれている人は、彼らに飛びかかり、ふたりの者を押しさえつけて、みなを打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した」(使19:13~16)

 - ① ユダヤの祭司長スケワの7人の息子たち(単なる宣伝文句であろう)
 - ② 彼らは、信者ではない。
 - ③ 悪霊は、彼らが信者でないことをよく知っていた。
 - (2) 12弟子が目撃した人は、イエスの御名によって悪霊を追い出していた。
 - ① この人は信者である。
 - ② イエスの御名を正しく使っている。

3. 「私たちの仲間ではないので、やめさせました」
 - (1) 12弟子たちから認定を受けていないという理由で、活動の停止を命じた。
 - (2) 愛の使徒と呼ばれるヨハネも、まだ聖化の途上にある。
 - ① 外部の者を仲間に加えないという分派意識がある。
 - ② 霊的権威は、自分たちだけに与えられているという特権意識がある。
 - (3) ユダヤ教では、分派的態度は珍しいことではない。

(例話) 過越の祭りの日がいつかという論争で、分派が起こる。

(例話) 無人島に流されたユダヤ人が、シナゴークを2つ建設する。

II. イエスの教え

1. 兄弟を受容せよ (39~41節)

「しかし、イエスは言われた。『やめさせることはありません。わたしの名を唱えて、力あ

るわざを行いながら、すぐあとで、わたしを悪く言える者はないのです。わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です。あなたがたがキリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです』

(1) イエスはこの人を受け入れた。

①イエスの名によって悪霊を追い出しているのは、信仰による業である。

②その人は信者である。

③信者が、すぐにイエスに反対することはない。

(2) 格言を用いて、この人を受け入れたという事実を補強する。

①当時、ローマ世界で広く知られていた格言である。

②矛盾するような2つの格言を、どう調和させるか。

「わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です」(マコ9:40)

「わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともに集めない者は散らす者です」(マタ12:30)

③一見矛盾に見えるが、調和させることは可能である。

*人は、イエスに関して中立であることはできない。

*イエスの味方でないなら、イエスに逆らう者である。

*イエスに反対していないなら、イエスに従う者である。

(3) 悪霊の追い出しから、より日常的で些細なことに論点が移行する。

「あなたがたがキリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです』

①相手をキリストに属している人だと認めて、水一杯を飲ませる。

②これは、師に対するもてなしである。

③この人は大変貧しいので、水しか出すことができない。

④そのように些細なことでも、神に覚えられている。

⑤もてなさなくてもよい事例

「あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。そういう人にあいさつすれば、その悪い行いをともにすることになります」(2ヨハ1:10~11)

2. つまずきの原因となるな (42節)

「また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです」

(1) 「わたしを信じるこの小さい者」

- ①文脈上は、子どものことであろう。
- ②適用としては、靈的幼子と考えてもよい。

(2) 「つまずきを与える」

- ①罪を犯させる。
- ②キリストから遠ざける。
- ③どんな弱い信仰でも、それを育てる方向に導く必要がある。

(3) 「大きい石臼を首にゆわえつけられて」

- ①これは、女が手で回す石臼ではない。
- ②「ロバの石臼」である。
(例話) カペナウムの遺跡にある石臼

(4) 「海に投げ込まれたほうがましです」

- ①埋葬されない死の恐怖
- ②特に、海の上で死ぬ恐怖(魂は海上を漂うと考えられた)
- ③つまずきを与えると、その結果は、海で死ぬよりも悲惨なものとなる。

3. つまずきの原因を取り除け (43~48節)

「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片手でいのちに入るほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。もし、あなたの足があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片足でいのちに入るほうが、両足そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。もし、あなたの目があなたのつまずきを引き起こすのなら、それをえぐり出しなさい。片目で神の国に入るほうが、両目そろっていてゲヘナに投げ入

れられるよりは、あなたにとってよいことです。そこでは、彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることはありません」

- (1) イエスは、誇張法を用いている。
 - ①体の部分の切断を勧めているのではない。
 - ②これは、弟子としての決意を迫る教えである。

- (2) 手、足、目
 - ①手は、行為の象徴であろう。
 - ②足は、歩みの象徴であろう。
 - ③目は、欲望の象徴である。
 - ④他者にとっても、自分にとっても、つまずきとなるものをすべて取り除け。

- (3) どちらかよいかの比較
 - ①体が完全でなくても、神の国に入る方がよい。

*ユダヤ人教師は、死んだ時の状態で復活し、その後完全にされると教えていた。
 - ②完全な体を持っていても、ゲヘナに投げ込まれたなら、より悲惨である。

- (4) この聖句は、クリスチャンでも救いを失うことがあると教えているのか。
 - ①これだけ読むと、そのように思えてくる。
 - ②新約聖書全体の教えの中で、理解する必要がある。
 - ③本当に救われている人は、救いを失うことはない。
 - ④自称クリスチャンは、時間とともにメッキがはがれていく。

4. 生きた供え物となれ (49～50 節)

「すべては、火によって、塩けをつけられるのです。塩は、ききめのあるものです。しかし、もし塩に塩けがなくなったら、何によって塩けを取り戻せましょう。あなたがたは、自分自身のうちに塩けを保ちなさい。そして、互いに和合して暮らしなさい」

- (1) 実に難解な聖句である。
 - ①モーセの律法に基づいて理解する必要がある。

「あなたの穀物のささげ物にはすべて、塩で味をつけなければならない。あなたの穀物のささげ物にあなたの神の契約の塩を欠かしてはならない。あなたのささげ物には、いつでも塩を添えてささげなければならない」(レビ2:13)
 - ②クリスチャンは、自分自身を、塩を添えた生ける供え物として捧げる。
 - ③この場合の塩とは、患難や迫害である。

- ④クリスチャン生活のイメージを一新する必要がある。
- (2) 兄弟たちとの平和は、塩気を保つことで可能になる。
 - ①共通の目標：神の国の拡大
 - ②共通の体験：患難や迫害

結論

1. 分派意識について

- (1) 原因は何か。
 - ①不安が原因で、他を支配しようとする(前回の結論)
 - ②不安感は、分派の根底にある。
 - ③罪責感も、分派の根底にある。
- (2) 12弟子たちは、自分たちの仲間でないという理由で、悪霊の追い出しをやめさせた。
 - ①しかも、この人は悪霊の追い出しに成功している。
 - ②弟子たちの失敗は、マコ9:14~18に出てきた。

2. ゲヘナについて

- (1) ギリシア語の「ゲヘナ」は、ヘブル語の「ヒノムの谷」の読み替えである。
- (2) ここは、モレクの神に子どもを捧げた場所である。
- (3) ヨシヤ王の時代に、ここはエルサレムの町から出る、腐って虫の付いたゴミの

焼

却場となった(2列23:10)。

- (4) ユダヤ人にとっては、虫と消えることのない火は、将来の永遠の裁きを象徴する

る

光景となった。

- (5) 新約聖書に12回出てくる。イエスは11回使用している。ヤコ3:6。
- (6) 罪人の最後は悲惨である。
- (7) 分派を乗り越える力はどこにあるのか。
 - ①キリストにある救いの確信
 - ②最も重要なものを第一にする。
 - *神の国の拡大
 - *罪人の救い